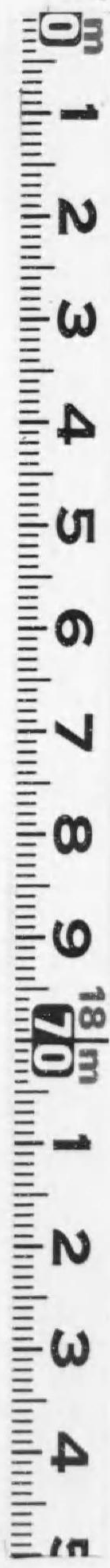


特115

481



私の鮮満棹



始



48115
481



私
の
鮮

滿
旅
行

伊
奈
松
麗
著

大正
15. 11. 27
内交



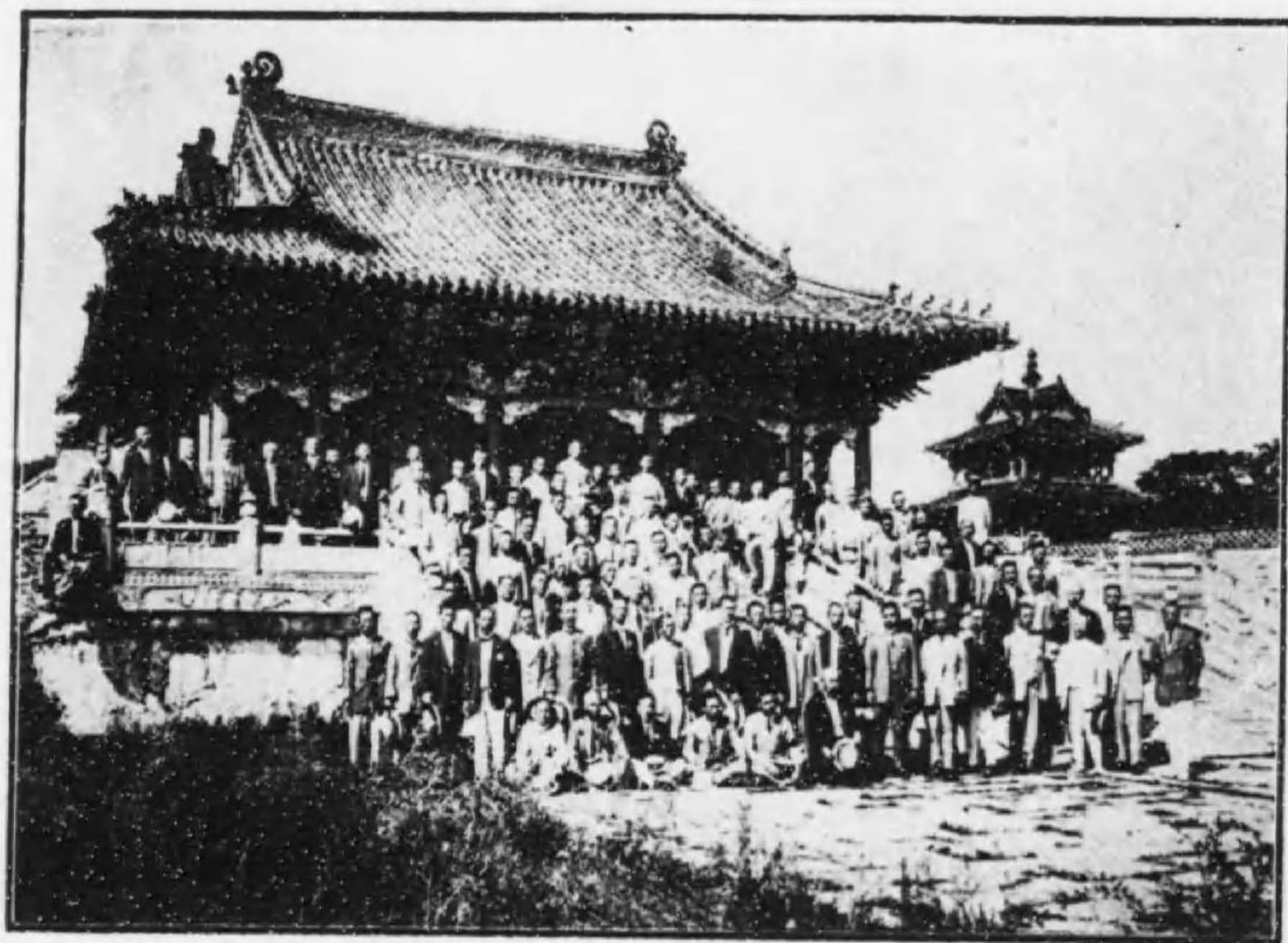
旅装の著者



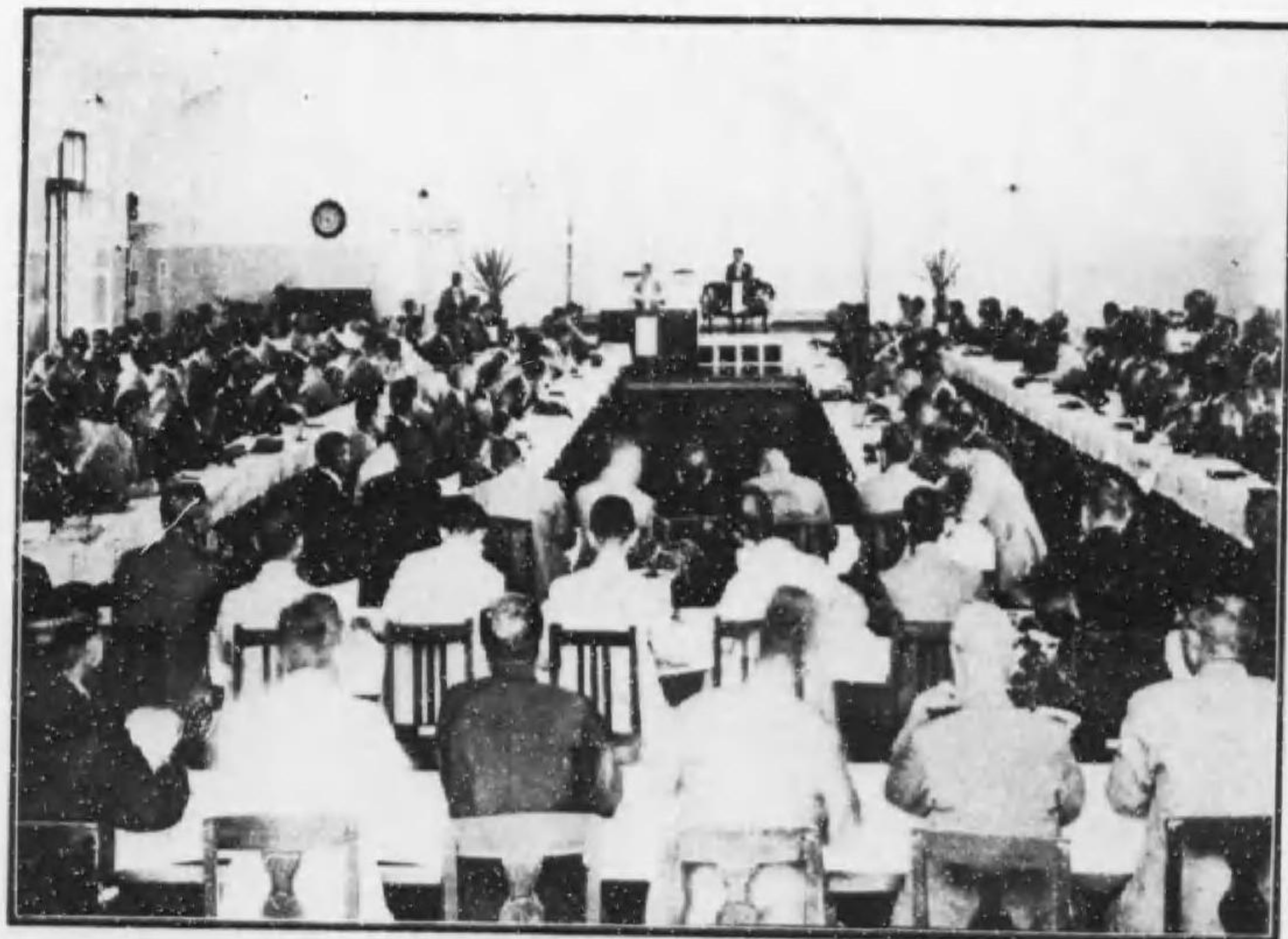
東京府立図書館蔵

東京府立図書館蔵





校長會議一行と北陵



奉天校長會議場 (著者ハ)

私の鮮滿旅行

目次

- (一) 緒言
- (二) 全國小學校長會發表意見
- (三) 日程と見學箇所
- (四) 鮮滿紀行
- (五) 旅後の感想



愛知縣の六名

私の鮮滿旅行

伊 奈 松 麗

(一) 緒 言

◇ 此の書は私が臍の緒をきつてから始めて海外へ出た大陸旅行の日誌です。見るもの皆目あたらしいので、二十五日間三千五百哩の旅が全くうぶの子供のやうな氣分に支配せられました。其の間の管見寸想を日々誌したに過ぎませぬから、人々には笑ひ種となりませうが、私には無上の記念であります。私一人で所有するのが惜しい位にまでうぬばれてゐますので、臆面もなく印刷にして御土産とする次第です。

◇ (1) 　　ごうして柄にも似ないこんな旅行が出来たかと申しますと、大正十五年九月六日奉天に於て、滿鐵會社主催のもとに、全國小學校長會議が開かれ、各府縣に向て五名づゝ出席を

(2)

もごめられましたについて、本縣からは知多郡横須賀小學校長成瀬涓君、丹羽郡布袋小學校長伊藤健次郎君、碧海郡安城第一小學校長後藤善一君、名古屋市門前小學校長金子樽雄君と私との五名が選ばれて派遣を命ぜられ、縣視學中村準一君同道で八月二十九日出發同會議へ出席して九月二十二日に歸りました。

◇ 全國の出席者は百八十一名で滿鐵會社は會議を兼ねて懇切なる鮮滿地方視察の案内をして下さいました。二等列車を無賃で提供して下さい、各地の馬車や自動車の便をはかつて下さるし、宿所の配意から見學場所の案内等至れり盡せりの款待を受けました。聞く處によると滿鐵會社は今回の舉に三萬金を投じて居ることです。

私としてはこの盛舉に加はることさへこの上もない仕合であるのに、縣教育會や本町や、本郡教員組合は多大な援助を與へて下さつたことは感激の至りであります。

◇ 會議に於て發表したる私の意見は、是れでも私の體驗から湧いた眞劍の叫びでありますから巻頭に載せました。御一讀を願ひたいとおもひます。會議狀況は日誌の中にて御覽下さい。

旅行中に各地で戴いた、案内書、パンフレット。調査書、寫真帖を始めとして各種の印刷物や私の求めた鮮滿に關する参考書類、繪葉書等を以て學校内に鮮滿文庫を作りました、各方面の詳細なる調査を必要とする場合にはついて御利用下さい。

(3)

(二) 全國小學校長會意見發表

人類の平和民族の共榮を實現する爲に
國民教育上努力改善すべき點

愛知縣渥美郡田原町中部尋常高等小學校長

伊 奈 森 太 郎

民族精神自覺七條

一、神の存在

われ／＼は、整然として乱れざる一大法則のもとに天地自然を創造せられ、是れを永遠に運用する處の偉大なる力であらるゝ神のおはすことを忘れてはなりません。

二、内在の神性

われ／＼は神の分身で、われ／＼の体内には愈々強大に開發せらるべき神性が内在してゐます。而かもわが日本民族は天皇を血統の中心として三千年來修練せられたる神聖なる神の血が体内に流れてゐることを忘れてはなりません。

三、彌榮の精神

日本民族は神の示されし建國の大精神たる神の大道—神ながらの道—にそつて皇室を中心として無窮に宏大に伸展すべき信念を有せねばなりません。

四、抱擁神化

日本民族は八紘一字の精神、世界同胞の情義によつて立ち、世界の文化を集め、如何なる民族をも神ながらの心に抱擁神化する力がなくてはなりません。

五、愛の充實

日本民族は世界の何れの國民よりも愛の心の眞に充實したる、公正雄大なる民族であらねばなりません。

六、個人の修養

日本民族は其の個人個人が内在の神性を開發し、心身共に世界優秀なる民族たらんことを期したる修養をなして、其の力を養はねばなりません。

七、使命遂行

日本民族は修養によりて個人を完成して、皇室と共に世界の人々から崇親の的となり、おのづから世界平和の指導者民族共榮の中堅となり以て人類永遠の幸福を大成せしめねばなりません。

説 明

わが國は幕末にあたり、わが田原の藩士渡邊華山先生の尊王開國論に其の端を發して、終に江戸時代の國是であつた攘夷論が破れてしまひ、王政維新となり、西洋の文明は日に月に入り來り、古く渡來した亞細亞大陸の文と我が國に於て神ながらの道のもとに合体して、政治組織に、物質文明に眞に東西の文化を合せた明治の日本が出來、大正の今日に至りましたが、精神修養の方面に於てはあき足らぬものがあります。

私共は今日こゝに民族精神の上に更に一大維新を行はねばならぬ時が來たとおもひます。當協議題の如き問題が全國小學校長會議に上らねばならぬことになつたのも、この缺陷から來てゐること、思ひます。これ私が本問題の意見として自覺七條を記した次第であります。今少しく其の意のある所を述べて見ようと思ひます。

〔7〕 外交問題上諸外國のなす處に仮にも暗き蔭があつたり、我が國の主張する正道が正道として通らないで、恰も我が國が恐怖せらるゝかの如く——見方によつては馬鹿にせらるゝかの如く——そこに外交の行きつまりや、排日といふやうな聲をきくことは、我が國とし

ては食料問題や人口問題と共に重大なる問題であるのみならず、世界人道の上に最大の不祥事であります。

◇
ことに我が國威が年々に高まると共にこの問題がますます困難になるといふに至つては、この原因が奈邊にあるかを考究することが先づ第一の急務であると思ひます。この點から考へまして滿鐵會社がこの問題を特に協議題としてお選びになつたことは深く感謝の意を表します。

◇
私は茲に敢へていひます。我が國威は年と共に盛になつて來てゐますが、日本民族の道念——私は道念を定義して「神の示し賜ふ大道におのづから乘らんとする心のむき」といつておきます神ながらの心といふも同じです——が甚しく頽廢してゐる爲國民の持つて居る忠愛の精神や國家觀念があまり偏狭で、かたくなで、現今の時代に適應しないものがあるからであると思ひます。

◇
今日普通いふ處の國家觀念は遠き古の神の大道によつてなされたる建國の大精神が餘程までにいちぢけてしまひ、國家といふ國境を範圍として封建的國家觀念であり、國境を超へ

て自國の個性を世界に伸べ、八紘一宇世界同胞の抱擁力を以て世界を神化する處の使命を有することを忘れてゐるやうであります。

◇
隨て忠君愛國の精神にしても、天皇及び國家に至誠奉公の身をさぐるといふ目的のみあせりて、其の力である處の民族個人の神性を開發して心身共に優秀なる民族となり、世界人類の崇親の的となり、大道の指導者たることが最大の忠愛であることを忘れてゐるらしくあります。

◇
我が國の古典を通して建國の太古をかへりみると、建國の精神である處の神ながらの道は偏狭なものではなく實に雄大で、神の末裔の日本民族は各其の神性を開發し、各其の生活を樂しみ其の血統の中心であらるゝ天皇を先導として、この大道によりて民族永遠の伸展をなし以て世界を神化せようといふ處にあるのです。

◇
されば釋迦の教義も、キリストの訓も、マホメットの説く處も、其の他あらゆる東西の文化にしても、いやしくも天地自然の大道にはづれてゐない處のものは皆所謂神ながらの道に外ならないのでありますから、只名の爲に、或は地の爲に、これに城壁を設くる要もなく、外道として斥くべきでもなく、我が國は古來これを探つて以て同化しつゝ來たのであります。建國の精神の伸びる處に封建の思想もなければ、征服の心もなく屈従もないの

です。

大道を樂しむ民族精神の中に世界の文化を同化して永遠に世界の平和民族の共榮をいたすが日本民族の信念であり使命であるべきです。

建國の精神は我が民族の個性で萬世不易であるが、生ける國家の觀念は時代によつて伸展してゆかねばなりません。舊幕代も、明治の世も、大正の今日も同様な形式の封建的の觀念の立場から國民道徳を説き、公民教育を説き、富國強兵を説いたとて、國民の精神が神ながらの大道を脱してゐては、説けば説くほど、人類の平和、世界諸民族の共榮と相容れざるものがあり、ますます國を危くするものであると思ひます。

私はこの美しき建國の精神をうけて國威の年々に隆盛になりゆく我が民族に道念頽廢の説明をしたくはないが一二の所見をあげてわが民族精神にうつたへんと欲するのです。

國民があまりに智的にかたむき物質的に馳せた結果として神の存在をすら信じないものが出來て來て、信仰心の缺乏は心身を頽廢せしめ、人生を淺ましき生活に導いてゐます。私はこゝで神について一言しておきますが、私のいふ神は偶像的のものでもなく、何處かの世界に超越してあるのでもなく、いつの世にか天地自然の整然たる一大法則を創造せら

れ、これを未來永劫に運用して行く偉大なる力、それが神であります。佛といひ道といひ、詞こそ違つてゐるが皆同じものであります。天地自然に存する一物はたとへ一つの塵といへどもこの法則やこの力の外にあることは出來ません人生も天地自然の一部であるからには心身の發達に於ても日常の行爲に於ても、この神の大道にのつとりしものは榮え神の大道から脱線したるものは亡びることは、個人も民族も國家も同様であります。わが國の建國の精神が神ながらの大道にあることは個人としても國家としても未來永劫に天地のあらんかぎり彌榮に伸展すべき生命のあるのです。

併しながら神を信じないものにはわが建國の精神、神ながらの道のわかりやう筈がなく、随つて神を信じないものには生活の眞の意義もわからなければ眞の勤勞や奉仕の出來やうもありません。

又神を信じないものには眞の修養も出來ません。修養も信念もなき頽廢した心身の所有者を驅りて、神の大道にそつた修養——神性開發によつて根本的に力つくること——をしないで、一定の規範をつくり、これを目標として何々の爲何々の爲といふやうに打算的に而かも煽動的に國民教育や公民教育を説いてゆく今日の教育は、まるでやせ馬に荷をひかせて上り坂にむちうつが如き状態であり、個人個人の心の中にも安き樂しきものが無く、

ともすれば正道に對する反逆的思想がきざしたり、悖徳の行爲に出づることはさもありさうなことで、實に精神上の危機であると思ひます。

個人個人に何等の信念もなく、安き樂しき心のないものが人に對し特に風習個性をことにした外國人に對して——親を缺くやうなこともありさうなことでありませう。

要するに現今の精神の頽廢は神の存在を忘れて神ながらの道に遠ざかつたことから來てゐると思ひます。



我國の馬は其質猛獸に近しとて久しき以前から外國産の溫順なるものを入れて馬質の改良を計つて居るにもかゝはらず、日本に渡り日本人に使役せらるゝこと一二年にして溫順なる馬はやはり猛獸に近きものになつてしまふといふ事實を聞いてゐます。

尙又先年捕虜となりし獨逸人が名古屋の俘虜收容所にゐました時獨逸人の生活を見ましたが、彼等が俘虜生活の中にも小さき書齋を森の中に立て、生活を樂んで居ることに驚きました。それが、それよりもつと私の心から驚いた一事は、彼等が小鳥を飼つてゐる、其の小鳥が鳥籠から自由に出て、樹間に美しき聲を出して歌ひつゝ飛びまはつて居り、そして食物と睡眠の爲には樂しく籠の中に歸つてくるのであります。我が國に於て未曾て見たことのないこの事實を見て驚かすには居られなかつたのです。

前の馬にしても、あとの小鳥にしても、これを禽獸の餘事と聞きすてゝはならぬ問題であると思ひます。愛の心の大小がかうした事實を作ると考へたとき、排日の因て來る處をも思ひ及ばす處がなくてはなりません。民族精神の道念の頽廢は今や禽獸にも惡化を與へてゐるのです、私はこれ以上に詳細の説明や實例をあぐることを好みません。



要するに本問題の解決として、民族精神の大維新を要とすることを力説し、國民教育上に民族精神自覺七條の精神をうちこんでこれを實現するやうにありたいのです。

以上

(三) 旅行日程と見學箇所

八月二十九日午前六時半田原發—名古屋愛知教育會會食—午後四時五十五分名古屋發、
八月三十日午前八時二十五分下ノ關着—十時出船、

釜山

(八月三十日午後六時上陸、三十一日午後八時出發、宿所花菱旅館)

第一小學校—團體組織—龍登山、臨地講演—灣内ランチ一週—驛前ホテル中食招待、慶
尙南道知事講演—商品陳列館—埠頭。

京城

(九月一日午前十時着、三日午前八時五十分發、宿所大東館)

南大門—朝鮮神宮—南山公園—經營院—動物園—昌德宮—女子公立普通學校—總督府—
博物館—景福宮—瑞麟洞明月館支店、朝鮮教育會招宴。
淑明女子高等普通學校—壽松公立普通學校—圖書館、講演—水下洞公立普通學校—金思
徹判書家庭訪問。

平城

(九月三日午後二時三十分着、四月午前六時發。宿所三根旅館)

瑞氣山—中學校化石林—平壤神社—七星門—乙密臺、軍事講話—箕子廟—玄武門—牡丹
臺—浮碧樓—大同江浮船—大同門—練光亭。

安東

(九月四日見學)

安東ホテル—鎮江山—安東神社—第一小學校—支那街—鴨綠江乘船視察—鐵橋—江岸の
狀況—筏。

奉天 (九月五日午前六時三十五分着、八日午後十一時二十分發。宿所大丸旅館)

城内見學—大西門—滿鐵公所—吉順絲房—宮殿—同善堂—奉天省長公署、省長招宴。

第一小學校—全國小學校長會議—第二小學校滿鐵社長招宴。

忠靈塔—醫科大學—南滿中學堂—奉天神社—奉天省城第二小學校—北陵。

撫順 (九月八日見學)

永安臺第二小學校—露天掘—大山坑—第二發電所—撫順中學校—高等女學校—撫順神社

—社宅地—渾河—水道源地。

公主嶺 (九月九日見學)

料理亭やまご—公主嶺尋常高等小學校—農事試驗場、講演、畜産科—支那街—豆問屋—

駐屯軍兵營。

長春 (九月九日午後五時三十五分着、十日午後四時五十分發、宿所名古屋旅館)

高等女學校—城内—自強學校—正金銀行—、長春全市街展望、講演。

哈爾濱 (九月十日午後十一時十五分着、十二日午前九時二十分發、宿所名古屋ホテル)

傅家甸—新方街秋林商店—高家溝—志士の碑—日露協會學校—露國商業學校—東支俱樂部

部露西亞料理—キタイスカヤ街—松花江—日本小學校、講話。

鞍山 (九月十三日見學)

製鐵所—還元焙燒爐、溶鑪。

湯崗子 (九月十三日午後二時五十七分着、十四日午前十時二十七分發、宿所對翠閣)

溫泉。

大連 (九月十四日午後七時三十分着、十八日午後十時出船、宿所花屋旅館)

地質調査所—日本橋小學校—電話局—中央試驗所—星ヶ浦—昌光硝子工場—西崗子公學

堂—遊覽道路。

碧山莊—油坊—埠頭—埠頭事務所—中央公園—速浪通。

旅順 (九月十六日見學)

爾靈山—博物館—偕行社關東廳招宴—北堡壘—記念館—白玉山—水師營。

九月十八日午前十時香港丸にて大連出船。

九月二十一日午前七時半神戸着、三ノ宮發京都下車、比叡山登山、京都三條いろは館泊。

九月二十二日京都發、名古屋下車、午後一時愛知教育會會食、午後七時田原着。

(四) 鮮 滿 紀 行

八月二十九日

——田 發——

快晴、朝の風心地よし。未明巴江神社に参拜し、午前六時半田原驛を出發す。人知れぬ中に出立しようと思つて、時刻をば内秘にしておいたのが、何處から洩れてか職員の方々が、見送りに來て下さつた。生れてから——轉任したことですらないので——多くの人の見送りを受けるやうな機會が一度もなかつた私には發車の刹那に感無量なるものが無いでもなかつた。

正午本縣出張者六名縣教育會に集合、愛知師範同窓會寫真班が待ち設けてゐて記念撮影をするといふので六名一緒にカメラにおさめてもらふ。

撮影後教育會は祖道の宴を全樓上に張られ、歡談數刻、午後四時五十五分の特急にて名古屋驛を發す。縣教育會役員、縣視學、縣屬、師範同窓會役員等の見送り下さる諸君多し。ことに金子校長の爲に門前小學校の父兄代表數十名が歡送の旗を押立て、の見送りにことの外にぎはしき光榮に浴した。

車中は一同洋服をぬいで浴衣にかへる。琵琶湖畔は夕陽湖面を染めて限りなく美しく、

(20)

京都、大阪、神戸の夜景もまぼろしのやうに過ぎていつのまにか睡りにつく。
ひらのねに夕日かたふき鴉の海みづもみ空もかゞやきにけり
のぞみのせて走せゆく汽車の夕窓に赤くかゞやくにほの水うみ

八月三十日

— 關釜聯絡線 —

やがて目ざむれば廣島々々とよぶ、午前三時半である。一天晴れ渡り、玄海洋上の平穩も思はれてよろこばし、再びまごろむ隙もなく下の關に着いたのは午前八時。折からの驟雨に夢をやぶられ一同待合室に入る。朝鮮に渡る男女の客の多いのに驚く。ほどなく空は全く晴れて人皆愁眉を開き、九時半乗船を始め十時半出船。程なく税關吏がやつて来てトランクの内容品を検査する。乗り合ひの一人は正直にトランクを開いた。トランクの入口に行列正しく列んでゐたのは出發の際令夫人が心づくしに入れておいた敷島である。税關吏は「烟草は百本までよろしいが、これではよくない」と二十本入一個を沒收して、さつさと引きあげ、あとは豆鐵砲をくつた鳩の如し。超過分の一個に税を課すればよいに沒收とはひどいと憤慨する輩もあつた。

船は關門海峡の入口にある六連島を過ぎ、いよ／＼音に名高き玄海灘に出づ。眞に紺碧といふ紺碧、生れて以來未だかつて眼にしたことのない紺碧の海が限りなく心地がよい。

而かもわが三千五百噸の昌慶丸が四望紺碧の正圓の中心に快速力で走つてゐるのである。

自分が其の船の最上甲板に立つてスーツ一町あまりも波間を飛ぶとひ魚をみてゐるあたりは夢かと思はれる。命二つあらばとび魚と共にあの紺碧の波中にとびこんで見たいといふやうな氣もするといふ人もあり。かくして日本海古戰場も小田評の中に過ぐ。

ますらをの魂かと思ふ紺碧の波をかすめてとび魚のごぶ

見渡せばはてなくまろき海原のたゞなかはしる舟の上かも

午後六時半巍峨と聳ゆる山の間の釜山港へと入る。出迎への人が棧橋に塔列してゐる、望遠鏡で見るとよく肥えた山内莊一君と若い廣中藤一君の顔が群集の中に發見せられた。思はず帽子をとつて上げると山内君も帽子をあげる。心に躍るものあるを禁じ得ない。出迎していたゞいたのは山内莊一君、廣中藤一君、中神重三郎君、金田君の令妹令姪の五人であつた。

(21)

滿鐵では「全國小學校長會出席者御案内」と示した大きな札を立て、係り員が案内の配意をしてゐる。われ／＼は——金子君は本部へ、伊藤君は令弟と共に東萊溫泉へ赴き、中村、成瀬、後藤の三君と私の四名——山内、中神兩君と共に山内君差しむけの自動車への。自動車は釜山の中央にある龍頭山の頂上までのぼる。釜山を一眸の中に説明すべき好

適所である。此處に金比羅宮こんびらぐうがあり、二百四十餘年前に對馬の宗氏の建立にかゝり、後住吉、天満の二神を合祀して、在港邦人の鎮護を祈つたもので、朝鮮に奉祀せる神社の最初のものであるといふ。近く海濱に龍尾山りゅうびざんが見える、武内宿禰、加藤清正を祀つた龍尾山神社がある。是れも内地人の建てたものである。朝鮮には朝鮮人の建てた神社は一つもないと聞く。自動車は市街目貫の場所を一週して定められたる旅館花菱に入る。

私は山内中神兩君と共に驛前ホテルに案内せられ、快談數刻宿に歸る。同行の中には旅に出て特に持つべきものは各地に雄飛せる友人と教子であると、いたく感じてゐた人もあつた。

宿は大きくないが新築したばかりで疊や木の香が未だ去らぬ心地よい部屋である。音楽學校半退とやらのよく語る女中あり、此所も賑かな夕飯の眞最中であつた。一酌陶然として、眞赤い西瓜を割り涼味をとるも爽快、十一時五十分就寢。

八月三十一日

——釜 山——

五時寢起。今日は天長節であるので軒頭に國旗をかゝげつゝあるのが見える。曉の街は涼しい。チゲと稱する——内地のしよい子に角のはえたやうな——ものを脊負つた白衣の鮮人が、うよ／＼と動いて来る、夏の鮮民労働者はチゲを寢椅子のやうにして屋外にね

る、目をさまして今あるき始めたのであるときく、日が出ると物をあたまにのせた朝鮮婦人が勢よくあるいて来る。姿勢のよいのに目がつく、チゲの上に唐傘たうさんをあふぬけにしたやうなあんばいの容器にまくわうりを數十個山のやうに積んで脊負つて来るものもある。釜山は人口拾壹萬、四割が日本内地人、六割が鮮人だといふが、店を開いてゐるのは悉く日本内地人といつてもよい。鮮人は労働者となつてのんきな、原始的な、どこを風がふくかといつた態度で安々として下等な生活を送つてゐることである。

朝食がはじまる前に、ゆふべの女中さんが抹茶を出して下さる、朝鮮にもこの風情あるかとなつかし。

午前十時釜山第一小學校に第二隊一同參集、——全國百八十一名を二隊に別ち、靜岡縣以東が第一隊、愛知縣以西が第二隊となり、第一隊は今朝出發。以後所要所にて一緒に、汽車は常に前後して發着するやうになつてゐる、私共は第二隊である。——滿鐵學務係より挨拶並に諸注意あり、長春小學校長は滿洲の學校長を代表し、京城の小學校長は朝鮮の校長を代表して迎ひに來られ、それ／＼挨拶あり、次いで總督府から、鐵道係から、慶尙南道から、釜山府からといつたやうに挨拶を兼ねての諸注意があり、役員の紹介を終り、是れで先づ團隊組織の除幕式がすむ。

それから女學校教諭案内のもとに昨日山内君に自動車で案内せられた龍頭山へと足を運

び、釜山の地理並に沿革に關する臨地講演あり、下りてランチに乗り、釜山港を一週す。釜山は釜山灣ともいふべき大きく灣入した灣の入口に周圍七里高さ一千二百尺もある絶影島トウインギがどつさりどすわつて居り、これによつて風波を避け、良灣の良灣たることの出来るわけである。市街は山の麓から灣を渡りて絶影島にまで及んでゐる。

船から見ると鮮人部落の家が山の上に椎茸でも生えたやうに群をなしてゐる。麓に内地人の家が出来、次第に鮮人の家は山の上へ上へとおひ上げられるといふことである。鮮人は生活を進めて内地人のやうに文化生活をする爲に金をためたいとも思はず、働きもせず、何年立つても原始的な家のまゝにあるのがあはれである。

港灣一周後ホテルにて中餐の饗あり、慶尙南道の知事來臨、冷かなビールに舌鼓をうつ。知事は和田氏。もと新潟縣にありしが本道は新潟縣と面積を同じくし、人口は新潟縣より少しく多いといふ。知事の本道經營に關する雄辯なる講話を拜聴し、商品陳列館に案内せらる、珍しきもの土産にしたきものばかりであるが、荷物のかさむを恐れて一品をも買はず。

午後七時釜山棧橋停車場にあつまる。釜山には本驛と棧橋驛と二つの驛がある。荷をつみこみて坐席を定め、一時間あまり散歩に出る、埠頭は波靜かにして夕風涼しく心地よきこと限りなし。

八時發車。山内、廣中、中神の三君見送りに來て下さる。始めて雄大なる廣軌鐵道にのる、一行の爲に特に二等列車二輛をつけ、頗るゆうがあるのので、各横にねて眠ることが出来る、寢臺のかはりに坐席を樂にするといふのが満鐵の心づくしである。

枕を貸して下さつたが使用法がわからないので、ボーイ君が使用法を教授して下さる。便所や化粧室が美しいといふので用もないのにわざ／＼見學に出かけて赤毛套式を發揮する、吾々は赤毛套の上々なるものを單に傑作と呼ぶ。

或先生化粧室の中でボタンやネジをあるだけ、片一方から、ひねつたり押ししたりして、これが湯か、これが水か、これがうがひ水、これが石鹼、是れでかうすればかうなると、一人で感心してゐる。とある隅の椅子に腰かけやうとすると、觸つたはずみに椅子の上部が蝶番でばかんとあがる。それが便器である、洋式便器で、今一重はねると日本式便器になる。こいつはおつたと感心してしまふ。これが傳へられると用もないのに代るがはる体驗に出掛ける。研究的態度の盛なることまるで小兒の如くである。

沿道朝鮮人の民家にはあかりが一つも見えないので、夜の列車はまるで無人の境を行くが如し、鮮人は日の出に起き日の入りに伏し、あかりを用ひぬが習慣だといふ。やつぱりのんきな民である。

汽車は北行し、夜はふける。寒さを感じて外套や毛布をかぶるものもあつた。

九月一日

— 京 城 —

夜があける、見學の多い爲か化粧室に水がきれて顔を洗ひたくても洗ふことが出来ないで、ゆふべ飲み残しのサイダーで口をすすぐ。安城あんじやうとか成歡せいかんとか、小さい時歌つた日清戦争の軍歌でおぼえてゐる處を過ぎる。松崎大尉の戦死も思ひ出されて今昔の感せまる。ほごなく京城であるといふのでボーイ君がトランクを集めて居る間に水源といふ驛につく、汽罐車破損の爲一時間餘り停車ときたので一同閉口限りなし。

今日は九月一日にて京城叔明高等女學校へ出校の鮮人女生が多数乗つてゐる、何れも下車して一時間をまつ。白い服でスベラカシの黒い長い髪がいやに可愛らしく、今まで美しい朝鮮婦女子を見たことのない校長連はどや／＼と下りて、とりまいて對話を始めるもあり、カメラに拾ふもあり。女生は笑ひながら快活に服装の自慢を始める。ほんとに朝鮮の女子服は崇高な感じを與へる。男生は洋服に變じてゐるが女生丈は依然として朝鮮服である。そこに朝鮮の女子服だけは多少改良の餘地はあるもの、確かに永遠の生命あるものと思はれる。

七時四十五分に京城驛に着く豫定であつた汽車は漸く十時につく。このあたりに見ゆる人家は種々雑多で、太古式から現代式、東洋式から西洋式、支那風もあれば日本向きもあ

りといふやうな奇觀を呈して居る。旅館大東館に入り朝食を終りしは午前十一時。

時間の遅延が本日の見學豫定に番くるはせをしたので、總督府や満鐵や鮮鐵や京畿道學務課や京城府學務課などの歓迎接待員の大活動となり、十臺の自動車を以て次から次へと一分の隙のないやうに輸送して下さつて、本日の日程を豫定の通りに實行し終へたのは實に各接待員の非常な努力の賜であつた。

まづ南大門から南山の朝鮮神社に參拜した。三百八十五段の石段をのぼつて京城を眼下に一望する場所にある。祭神は天照大神と明治天皇で社格は官幣大社である。大正九年五月から五年六ヶ月の歳月と二百萬圓の經費とを費し昨年竣工したのであるといふ。附近に漢陽公園と南山公園とがある。

こゝで總督府の國寶ともいふべき愛知縣出身の加藤覺觀先生から京城の歴史と現状について興味ある講演があつた。

京城は流石に朝鮮の首都であるだけに大きい、四方に山嶽を圍繞し南西の一隅が僅かに開いて漢江が其の南東を流れ、山河襟帶自然の城廓を爲してゐる、周圍の山腹には昔の城廓の残つて居るのが見える、市街は東西一里三十町南北三里、人口三十四萬、——此の内、内地人八萬五千。——あれが總督府新廳舎、あれが昌德宮、あれが景福宮、あれが德壽宮、あれが朝鮮銀行、あれが京城帝國大學、これが本町通といふやうに加藤先生のステ

ツキの先から一々目星しい所が摘出される。
自動車はまつしぐらに京城の街を貫いて經學院にゆく、こゝは昔の朝鮮に於ける儒教の最高學府である。今は歴史參考品として見るに過ぎない。鮮人の院長さんから内地語で一場の御話がある。庭前の樟やいてふの大樹にせみの聲がきこえる。

大樹古り學院さびて蟬の聲

動物園をぬけて李王家の昌德宮を見る。李王殿下は初め德壽宮におはしたが明治四十二年七月この宮に移られ、今も李王家の邸となつてゐる。動物園と植物園と博物館とは木曜日を除く外一般に公開せられ京城隨一の遊覽地である。敦化門を入ると右が李王職、左に聳ゆるが仁政殿、續いて宣政殿、奥まつた所に日常の御座所であつた大造殿がある。李王職の朴さんから一々案内せられ、朝鮮の文化を笑つた一同もこゝに襟を正すの感があつた。續いて其の後方の秘苑——内苑のことである——を見る。流石に宮城だけあつて朝鮮の他の場所と異なり大樹が鬱蒼としてゐる。木下をあるくのであるが暑いこと限りなし、夜と晝との差の大なるに驚く、汗ダク／＼になつて廣い苑内をめぐる。谷間にラジウム冷泉がある、案内の朴さんはポケットからニームの Copp 數個を出して貸して下さる。吾々に味あはしめんとすの用意である。毎日うちに居て Copp に二十杯位も水を飲んで過して來た今年の夏、旅行出發以來始めてこの冷泉をくみて蘇生の思ひがした。

これより自動車は再び南山にかへり、女子公立普通學校講堂にて中食の饗をうく、午後三時である。これは道と府との聯合招待であつた。

食後の自動車は總督府の新廳舎に行く、大正五年六月起工、大正十五年に完成したもので、工費七百萬圓、復興式五階建、花崗石張鐵筋コンクリート造、各階總建坪九千六百餘坪、中央の塔の高さ百八十尺、東洋一の建築物であるといふ。實に全道を壓するの感がある。鮮人が、日本の皇居を内地からこゝへ移すのにちがひないといふ風評を立てたといふのも鮮人としてはありさうなことであると思つた。

その後方に大院君が一世の民力を竭して明治元年に完成したといふ壯麗な景福宮が荒廢のまま總督府となつて保存してある。今昔對照の皮肉甚しきものである。私は草の一本なりとも取つてやりたくなつた。諸儀式の行はれた勤政殿、朝夕政を見られた思政殿、宴會場の慶會樓、と一々案内せられ、閔氏の殺害せられたのはこの奥であるなどの話をきかざるゝと李朝の昔が偲ばれざるを得ない。

夏草や李朝榮華の夢のあと

傍に博物館がある。千八百年乃至千百年位前の新羅王朝時代の遺物がづらりと並べてある。實に貴重なるものである。朝鮮にも昔この文化のありしかと思ふとき、民族の頽廢はぞ恐ろしいものはないと今更の様に思はされた。併し、國も亡び民族も滅びても今に藝術

品だけは光をはなつてゐるのを見たとき、藝術の生命の貴きを一入に感じた。

美しき器となりてのこりけり亡びし國の榮えせしあと

ほろびたる國にもとはに残りけり神のわざとも思ふ手なみは

これより前日に京城に着して居る第一隊と合して全員百八十餘名朝鮮教育會の招待晚餐會にのぞむ。會場は瑞麟洞明月館支店で朝鮮料理によつて京城情緒を味はしめやうといふ計劃であるらしい。開會六時半料理も二十品あまり出で、まづくは無かつたが、美しい妓生キヤンの鴨綠江節、國境警備の歌、扇面揮毫（書も書も巧なものである）、それから心地よい崇高な感を與へる服装など随分感心した人が多かつたやうである。各種の舞——正樂、四鼓舞、僧舞、劔舞といふやうなもの——もあつたが、樂器は二尺八寸もありさうな尺八やうなものや、大きな鼓や、笙のやうなもので、凡てが足の活動のない、上半身のみ變化のある舞で、まるで平安朝か神代を想像させられるものだ、うまいとも下手とも一向にわからぬ、獻立表や餘興プログラムの立派なものを配布せられたがこゝには畧する。續いて朝鮮教育事情に關する活動寫眞があり、開散して宿にかへりしは午後十時。

九月二日

— 京 城 —

目ざむれば雨がしどくと降つてゐる。京城には珍らしい雨ださうで珍客を迎へたしる

しだといふ。いやな記念だ。窓をあけると前の電柱の上にカサネがなくてゐる。

京城の街路はアスファルトで立派に出来てゐるのでいくら雨がふつても靴を汚すやうなことはない。併し雨ふりに路をきくもうるさいので、わが班は自動車をやどつて八時迄に集合といふ叔明女子高等普通學校へ行く、鮮人の高等女學校である。昨日水源で對話した女生徒がある。こゝを三十分ばかりで通覽した。目あたらしき直觀が多い。

それより隣の壽松公立普通學校を視て、鮮人家庭金鉉氏住宅を見る。これより第一第二隊一所に總督府圖書館に至り、松村總督府外事課長から朝鮮統治の過去現在及將來につき、高橋總督府視學官の朝鮮の教育に就ての講演があつた。講演の終りしは正午。是より自由開散となる。

花月食堂に至り本縣出身者道視學森武彦君、京城南大門公立小學校訓導沓名泰三君、京城湊洞公立普通學校訓導堀田藤市君、教諭柴田勝次君の饗を受く、ビールの味格別によろしく話に花が咲く。

同氏等の案内で水下洞公立普通學校參觀、同校訓導を介して水下洞の金忠徹判書の家庭訪問をなす。金判書は朝鮮の大臣級の人で目下病中、其の子はかつて師範學校長たり、其の孫にあたる方が應接して下さる。二十一、二歳と見ゆるが獨逸に留學して歸途内地へも寄りしといふ。家庭は家族八人、使用人八人、食客十四人計三十一人で間の數九十間あり

といふ。男女の別を劃然としてゐる外舎、中門、内舎、内庭等隅から隅まで見せていたゞく、最も奥まつた外庭に大きな瓶が二十個あまりもある、その内容品は酒や醤油やつけ物の類であつて瓶の多いのは資産の富めるを語るに足るのであるといふ。屏敷内を一周して再び外舎の客間に入り、酒の饗あり、先程見た瓶の中にある自家製のものであると説明せられる、沸し卵が出る、梨が出る、歡談時餘にして旅館にかへる。

夜本縣人五名來訪、午後十一時迄四方八方の話に時をうつす就寢十二時半。

この日午後自由開散になつたを幸、同僚の一人が鮮人の傳をやとつて友人の宅を訪問しやうとする。車夫が少しも走らない、何といつて急がせても走らない、雨が降るから下りはしなかつたが歩いた方がよほど早かつたといふ。京城の友人説明して曰く、「車夫は走らないのではない、走れないのである。二日位飯を食はないで居た車夫と來たら全く走れないのだ。彼等は働くことが嫌いで、二三日位食事なしにブラ／＼してゐるやつはいくらもある。急ぐ時に空腹の車夫などにつてたまるものか」「ナールほど」。

九月三日

——平 城——

夜來の雨晴れて心地よし、全く秋晴れの感じがする、暑いといふ感じは少しもない、八時十五分京城驛を發車す、森君見送りに來て下さる。

汽車は高からぬ山の間の水田や畑の間を走る、鶯の處々に遊べるを見る。山間の鮮人部落も畫のやうに雅味がある。丸くもり土をした美しい芝生の墓地も處々に見出さる。

一行は妓生から教はつた國境警備の歌を合唱しつゝ平壤に向ふ、歸るまでにうまい唱い手となつて土産にせようといふのだが私には出來ぬ話である。

午後二時十分平壤に着く森下敷君迎へて下さる。例の如く案内係に導かれて電車にのり郵便局前で下車し、瑞氣山に上り平壤を大觀し大要の説明あり。平壤は大同江の西岸にあり人口十二萬、内地人の在留するもの二萬餘なりといふ。

中學校に至り化石林を見る。侏羅紀の植物の直徑二尺乃至三尺のものが立つたまゝに化石となつて林の如く何本もある。校庭の隅から中庭に渡り一々保護設備をして錠をおろしてある。

これより再び電車に乗り平壤神社に參拜して七星門、箕子廟、乙密臺、玄武門、牡丹臺、浮碧樓、お牧の茶屋等を見る。

箕子廟は流石に附近の樹木が保護せられ老松のゆかしきものあり、廟と土屏とは残つてゐるが屏のくゞりから中に入りて丸塚の周圍芝生の上を靴のまゝで廻ることが出来る、一寸失禮だとは思つたが、誰もやることだから臺上に上つて見た。王侯も子孫の亡びてはあはれであると氣の毒に思つた。併し發掘せられないだけ幸である。

箕子廟や松に太古の風薫る

乙密臺は七星門、玄武門、牡丹臺と共に古來平壤北方防備の要害で、文祿の役並に日清戦役の古戰場として感多きものがある。

乙密臺上にて七十七聯隊付少佐の文祿、日清兩役に於ける現地講話あり、それより玄武門を見る。現地講話の戦蹟がわが郷土の豊橋聯隊の活動した處だけに鼻高々ときいてゐるが講話半ばにして時々感胸にせまるものがある。

玄武門をくゞり牡丹臺にのぼる、乙密臺のやうに樓もなく手入れもしてゐないので、さいかちの茂つた細い路をわけて上る。併し臺上から大同江を望み平壤市街を俯観する景の雄大なる、胸ひらく心地がする。牡丹臺を下れば永明寺、お牧の茶屋、浮碧樓などが江に望んで立つてゐる。浮碧樓は昔外國使臣をこゝに招き平壤美人に款待せしめた處で、支那の使節などが此處で腰ぬけになつたこともあつたとき、平壤は風光のよいのみならず朝鮮美人の本場で、今も妓生學校があるといふ、朝鮮第一の美人として評判の高い金玉蘭などの寫眞は休憩所休憩所を賑はしてゐた。

午後六時から轉錦門下に船を浮べ、大同江にさをさして夕景を大同門まで下る。大同門のわきにある練光亭は小西行長と沈維敬とが談判して行長が一杯食はされた處である。

この舟遊一時間は平安南道と平壤府教育會とが、われ／＼の行をねぎらふ爲の企で、風

雅な遊船八艘にビールと、黃州林檎をつみこみ道々の風光をさぐり昔行長等がやつた遊を偲ばしめるといふおもひつきである。吾々の船には妓生は居ないが、歌だけは江上はるか遠くから、或は絶壁の上からときこゑて來る。

夕さればいつしか秋の大同江中は汗の旅めぐりしつ

いづこよりか涼しき唄の聞えけり大同江の舟のゆふくれ

目の早い連中が歌の聲する船を見つけて、指さしながら鮮人の舟子にもものいへば、言葉の通せぬ舟子は、心得たりといはぬげに早くも舟の方向を左に轉じて盛にこぐ、他の舟子も皆司令官の命令とでも思つたのか三方からへさきを向けて一勢に包圍攻撃の陣形で舟をすゝめる。私共は何事かと思へば遊野郎が数名で、うすい着物をきた妓生と心地よく唄つてゐるのである。妓生の舟も何ごとかど驚いて辛じて逃げ出して他岸に上陸した。罪深きことしたりとて一同大笑ひ。言葉通せぬ鮮人舟子の失敗としては頗る艶っぽい滑稽であつた。

絶壁の岩には古來の文士が筆をふるつて書いた文字が彫刻せられてある。暮色やゝせまるの時ゆるやかに大江を下るの趣味は筆のよくしがたいものがある。

牡丹臺の繪は希望社發行の心の日記にも口繪にのせてあるので、常に少なからぬあこがれを持つてゐたが本日この實景の壯大なる中に抱擁せられ夢のやうな感がした。

今日の宿舎、三根旅館に入りしは七時半、森下君來訪十時迄快談、明日は午前四時寢起といふので日誌かくこともせず就寢。

九月 四 日

— 安 東 —

午前四時寢起、五時旅館出發、六時十分發車、安東に向ふ、森下君令息と共に見送りに來て下さる、雨降ではないが天候や、心配すべきものあり。手紙を認めたり、おねぶりしたりしてゐる中に列車は北へ北へと進み、國境近くなると山の形がかはる。華山先生の夜景の山水にかいてあるやうなのが目につく、その中にやわらかい丘陵になる、内地にみれぬ大陸的地勢が思はれる。まもなく沖積層へ出たと思ふと鴨綠江沿岸の新義則につく。

建物が洋風で街路の様子がかなり變つて見える。これより鴨綠江を渡り、初めて外國へ足を入れるといふのである。鐵橋上を走ること三分對岸の安東へ着、天氣よし。此處に下車すると時計が一時間ちがふ、標準時の關係からである。午前十一時を十時にもどす。

税關關係から寫真機や望遠鏡を持參するものは一々持參の證明書をいたゞくので大變に面倒である。これをいたゞかないと歸りに輸入品として十割の課税といふのだから皆人おとなしく證明書をいたゞく。

安東ホテルに案内せられて中食をなす。煉瓦造の壯大なる心地よいホテルである。

午後一時から滿鐵の心づくしで二頭びきの馬車三十臺を連ねて安東の西にある鎮江山へ上る。馬車が内地のと趣をことにし、前の馭者臺が高く、其のうしろ低く三人向きあひに腰をかける處はまるで王様に侍従二人といった様な見えで、二頭の馬には鈴をつけ、車臺の肩に日本國旗をかざし、このいで立ちの馬車が三十餘臺列をなして、廣い洋館建の市街の街路樹の間のアスハルトの途をリン／＼と走つて行くあたりは昨日の大同江下りにおどらぬ痛快であつた。

秋晴れや日章馬車の三十輛

鎮江山には安東神社が祀つてある。頂上まで登つて安東大觀の臨地講話がある。鎮江山は、高さは田原の藏王山よりやゝ低い、眼下に安東市街を見下し、鴨綠江の流、延々として海にそゞぐあたりまで望むことが出来る。日清戰蹟の九連城きゅうれんじょうなども指さすことが出来る。

安東は日露戰爭の際兵站部をおいた處で遼陽攻撃の後方中堅で遼陽破るれば安東によるより外なく、安東あつて大膽なる遼陽戰に勝つを得たといふ。これより日本人の留まるもの多く、今日に至れりといふ。

人口十二萬、内日本人一萬人、繁華なる新市街は日本人の經營である。山を下り再び馬車に乗り第一小學校を參觀す、煉瓦造の堂々たるものである。三度馬車を驅りて支那街に

入り、目ぬきの街を東西南北と走りまはる。私と成瀬君と満鐵案内係の三名の乗った馬車が一番先頭を走る、其の得意おもふべしとは誰かの後からの評であつた。

朝鮮人は京城あたりでも仕事をせずにはふら／＼してゐるものばかりであるが、一度支那の安東に足を入れるれば支那人が營々として急がしさうに働いてゐるのを見る。案内の人に話せば支那人の勤勞には内地人も到底及ばないといふ。

これより鴨綠江岸に至り汽船の引舟にのせられて安東沿岸の視察をなす。帆檣林立の江岸、筏の浮べるあたり、實に見るべきものが多い。筏の上に家を造り一家生活の天地をのせて下つて來てゐるのもある筏の上には花壇もあれば、豚や鶏の居るのも見える。

船のまさに出でんとする時であつた、一人の鮮人が平氣で吾々の船に入りて坐す。叱して追ひ立つれば酒氣芬々千鳥足で出て行く、案内の人曰く、あゝして酔つて歩く國民は鮮人と内地人だけで、他國人には見られぬ圖である。支那人など決して醉態を人に見せたることなしと、おもしろい觀察である。

鴨綠江の鐵橋は全長三千九十八呎で橋桁が十二連からなり、其の中央の一桁は一日に四回開轉して十字形に橋を開くやうになつて居り、其の間に大きな船舶が航行するのである。橋上線路の兩側は幅八呎の縣道となつて通行を許してあり、東洋一の鐵橋であるだけに異彩を放つて居る。吾々の船が橋下に近づくとき丁度開轉を始めて大きな帆船が靜かに通

行するのを見た。

上陸して四度馬車にのりてホテルにかへる。午後五時夕食をすまし、金子といふ雜貨店に土産物をひやかしにゆく、寶石、絹紬等買ひたきもの多けれども税關の關係六ヶ敷ければ多くも買へず。

八時三十分安東發の列車に乘じ、奉天に向ふ、外國であるだけに朝鮮内の旅行と異なり、各縣人團隊代表者の見送りでプラツトホームは山をなす。愛知縣人も百名ほどありて代表者新美平四郎、川瀬正之助、森川長三郎、森林商店大池喜市の諸君が見送りて下さる。

九月五日

——奉天——

午前六時三十五分奉天着、驛前の廣場を中心にして前方へ放射狀に五條の大路が通じて居り——附屬地は何れの處もほとんど同様——驛前の建物の壯大なるに驚く、一寸東京驛に下りた感じがする、宿所は驛前の大丸旅館。煉瓦造の大したものである。第二隊全部これに入る。各縣別に部屋割りがあり、茶や菓子や朝風呂まで整然たる用意が出來てゐる。三泊の根城としては十分である。

其の日のプログラムは夜前又は早朝に渡されるのが常である。本日は旅館入りの後印刷

した日程とこれを説明するに足る印刷物とを澤山に配布せられた。

朝風呂をすまし、鬚をすつて朝食をなす、午前中休憩といふので出發以來始めてのんびりとした心地がする。午前中行李の整理や洗濯物の依頼、手紙を書いたり日誌の記入といふあんなばいで時間はすぎ、十一時中食。

正午一同整列、こゝに馬車一臺に二人づゝを載せて見學をなす。第一隊とは別に廻るけれども要所々々の見學は時間を打合せて一緒になる、馬車の数が九十餘臺であるから廣大な市街も混雑をする。

奉天も新市街と舊市街とある、新市街は日本の附屬地、滿鐵經營の市街で滿鐵から事務所長をおいて治めて居り——人口三萬五千内日本人二萬——。舊市街は昔からの支那街で支那の政治が行はれてゐる——人口二十四萬——。單に奉天と稱しても全々二様の市街が並んでゐるのである。これは長春にしても公主嶺にしても撫順にしても滿鐵沿線は同様である。

奉天の舊市街は城廓をめぐらした所謂奉天城で、城内に更に高さ三丈餘の壁をめぐらした内城があり、道路は井字形に出來て八門によりて扼せられ、門の入口は朝五時に開かれ夜十二時に閉される、奉天の銀坐通ともいふべき町はこの中にある。督軍公署も宮殿も滿鐵公所も張作霖の私邸もこの中にあるのだ。

われ／＼は日本市街を通過して大西門より内城に入り、督軍衙門前を通り、滿鐵公所に至る、こゝは滿鐵の支那に對する役所で應接室會議室など立派なものである。これより四平街と稱する賑かな所に出て、松坂屋式の吉順絲房きちじゆんしじやうと稱する商店に入る、値がわからぬのと語が通せないので買ひものは面倒なれば買はず。

これより宮殿に至る宮殿は近年見せないものであるが特に省長の命で見せて下さつた。宮城は奉天城内にあり、金鑾殿と稱し、清の太宗の崇徳二年の建造で今を去る二百八十餘年前のものであるといふ。大清門、崇徳殿、鳳凰樓、清寧宮等あり、青黄の瓦色美しく聳えてゐる。今は軍隊の教養所にあてゝ居るやうである。

支那街の要所要所に支那兵の歩哨が立つてゐるが銃も劍も持つてゐない、銃劍を與へると逃げて賊に投ずるからであるといふ。銃劍を持つて馬賊に入ると優遇せられると見える。歩哨にしてかういふ有様であるから、一人一人の外出はいふまでもなく丸腰である。

馬車は馳せて同善堂に至る、日清戦役に平壤で戦死して其の名を知られた左寶貴が設立した社會事業で、孤兒院、女子實業學校施醫院、牛痘局、貧民收容所を始めとし棄子所まで設けてあり、實に社會事業としてのあらゆる機關が完備して實に珍らしい施設である。棄子所は壁の外に穴があつて、そこへ棄子を入れると、内部で自動的にベルが鳴る。そこに不寢審があつてこれを拾ひ上げるやうになつてゐる。斯様な設備があつては棄子が多くて

困りはしないかとときくと、支那人は如何に貧しくても母子の愛は至つて深く棄子するやうなもののはめつたにないと言つてゐた。

同善堂の休憩所で森田といふお醫者さんが支那事情に關する講演をして下さつた。森田氏は張作霖あたりとも親しく、かつて新聞紙上に其の名を知られた人である。

午後五時より奉天省長公署に於て省長莫德惠氏の招宴あり参列す、盛なる支那料理を始め戴く。省長の挨拶、松下專吉君の答辭、一々通譯でやるのだから面倒である。支那料理は十二人づゝ一テーブルを圍み、これに公署の日本語の出来るものが一人づゝ附いて作法の指導から始まり、一同舌鼓をうちて開散す。省長が出口に立つて一々の握手には恐れ入つた。私もきゆつと握つてやつた。あたゝかい手であつた。

馬車にて歸館したのは午後八時、今晚は面會者もなく直に寢につき安眠をなす。

九月六日

——奉天、全國小學校長會議——

今日は全國小學校長會議の開かるゝ日である。八時半會場の奉天第一尋常高等小學校に赴く、九時開會、内地、朝鮮、臺灣、樺太、廣東州及滿鐵沿線の諸學校長で、それこそ内外國をあげての晴れの會議である。二十間に十間もあるかと思はるゝ煉瓦造の講堂に嚴かに議席が作られてある。先づ井上學務課長の挨拶あり、協議題「世界の平和民族の共榮を

實現する爲に國民教育上努力改善すべき事項如何」についての發題者の趣意に關する説明あり、いよゝゝ協議に入る。發表者は十名を限り、他は發言權なしとし、一名五分づゝといふ制限である、プログラムを見ると私は二番目である、一番は大連大廣場小學校長石川龜松君であるから、私が内地側としては眞先きといふことになつてゐる、次が安東、次が石川縣、次が臺灣、次が新潟縣といふやうに内地對、内地外といふやうに定められてゐる。私は民族精神の大維新を行ふべき時に會して居ることを叫んで「民族自覺七條」を提唱した。二百餘名が靜聽してくれたのはうれしかつた。豫め自分の意見を印刷して會員に配布したので與へられた時間は短くとも見る人は見てくれたこと、思ふ。後から談話題もあり色々の意見が出たが、何れも支葉末節の施設や、煽動的な氣陷ばかり盛な發表が多くて、根本的な力ある意見の少ないのは甚だ淋しい感じがした。後で委員附托となつて協議題の決議案が出来て型の如く滿場喝采の内に決議せられたが、これとて對外的のおざなりの箇條ばかりで、自己が各の精神に省みて先づ自らを救ふ爲に心の上に一大維新の要あることは忘れられてゐるらしい。

決 議 案

世界ノ平和民族ノ共榮へ人類窮極ノ理想ナリ、吾人ハ國民教育上ニ於テ左ノ事項ニ努力シ以テ其ノ趣旨ノ徹底及實現ヲ期ス

要 項

- 一、列國ノ實情及國民性ヲ理解セシムルコト
- 一、國際道徳及人類愛ノ精神ヲ高潮スルコト
- 一、隣邦ニ對スル友誼ノ精神ヲ一層助長スルコト

滿鐵學務係の池田氏が釜山で「會議は名目上の形式で旅行が主である」と口言せられたとき、私は甚だしく不快であつた。世界の平和民族共榮に關する小學校長の奉天會議はわが國教育上一新紀元を劃する有意義なるものになるのであらうと思つた私には大にうらぎられた感がした。一人五分と發表時間を定めた處にも眞劍なる人には大なる不快がある。中には國際的の芝居位に考へてゐた人もあつた。實に眞劍味を缺く態度であると思ふ。

自分の發表した「民族自覺七條」は巻頭に掲げたからこゝには略す。
正午に議事を了り、午後は左の講演があつた。

滿鐵會社の事業一般

滿鐵學務課長 井 上 信 翁

滿洲行政に就て

關東廳地方課長 小 川 順 之 助

支那風俗に就て

滿 鐵 理 事 梅 野 實

日木と支那との習慣の比較

滿 蒙 協 會 某

午後六時より第二小學校に於て滿鐵社長安廣伴一郎氏の招宴あり出席、支那料理に餘興

として支那名妓の歌舞、並に支那特意の手品あり、教育専門學校長保々隆矣氏の初等教育に關する意見あり、一同をにぎやはす。

會後市街を散歩す、海外にある心地もせず、只建築が名古屋の廣小路の明銀や日銀あたりをづらりと並べたといつた風で、道が全部アスファルトといふのが違ふ位のことである。

九月七日

—奉 天—

雨晴れて秋冷心地よし、今朝の新聞を見ると去四日東海道風暴れて下地町津田小學校倒潰死傷十數名とあるに驚き、朝七時自校へ電報で見舞を出す。

午前九時例の如く馬車を連ねて千代田通を東に進む十數町にして忠靈塔を訪ふ。忠靈塔は奉天會戰に戦死したる忠勇將卒の納骨堂で二萬三千二百八人の遺骨が箱に納め號を附して奉安してある關東廳陸軍部内納骨祠保管會の管理に屬し昨年九月工事落成をつげたもので、堂前の禮拜について内部の納骨を拜觀したとき、今日の滿洲ある二十年前にこの犠牲のありしを思うて感無量なるものがあつた。

幾萬の血汐ながしてきづきけん今は榮ゆる花やかな街

次に南滿中學堂を見る。大正六年四月滿鐵の創立にかゝり民國人に高等普通教育を施す所で、主として東三省並に各省の俊才を收容してゐる。卒業生は重に日本内地の上級學校

に赴くを本体とし、卒業後直ちに諸方面に就職し、日支間の楔子たるもの尠なからずとは校長池上庄次郎君の話である。

次に滿洲醫科大學を見る。四階建の煉瓦造で階上運動場に案内せられて、周圍を大觀しての説明がある。附屬地の日本市街は眼下に見え城内をも遠くのぞみ、北陵の森もかすかに見えてゐる。醫大には愛知縣出身の椎野、久能、松井三博士がある、お目にかゝる機會は得なかつたが意を強うするに足る。

次に滿鐵公園の傍にある奉天神社に參拜す、天照大神と明治天皇とを奉祀してある。日本人のある處必ず壯嚴なる神社のあるを見る。

次に奉天省城第二小學校を見る。これ純粹の民國經營のもので民國の小學校である。初學年の教授をのぞいて見ると、女の先生が讀方を教へてゐる。讀本を見れば「園中花木多鄰兒來欲折一枝我急止之」の章を教へてゐる。意字を國字とする國の國語教授の困難なるを思ふ。支那にも近年國字改良問題が起り、音字を作り之れを使用せしめんとする運動があると聞いてゐる。

次に郊外一里餘の北陵に赴く、廣漠たる滿洲の平野のぬかるみの途を五十臺の馬車が列をなして走る處は内地に見られぬ圖である。何となく心が廣々として心地がよい。

大國の城外秋の風晴るゝ

樹木の少ない滿洲にもさすがに清朝の太宗文皇帝の陵だけありて周圍二里餘の丘陵が老松蒼鬱として別境の感がある。正面に大理石の碑樓があり次に前山門がある。近年開かれしことなく、參拜者は横の通用門から入るより外なかつたが本日限り開けはなちにしてある、大方省長の命ならんといふ。次に碑亭、隆恩門、隆恩殿、門樓とあり、何れも黄色や青色の瓦にて四壁から垂木のすべてが極彩色の美を極め、最後部に寢陵あり、丸塚である。全部ぎしつとした城壁をめぐらし、ことに隆恩門以内は其の城壁の上に砲車をも引き得るほどの大路が出来て一周することが出来る。宛然たる一城廓である。文皇帝當時の清朝が滿蒙漢の三を合せて大帝國を建設した其の隆盛が偲ばれる、殿名や碑文皆三國語を以て三様に記載してある。

北陵といへば滿洲の日光だときいては居たがなるほど美しい、繪で見たよりも、文で讀みしよりも美しいとは皆人の評である。併し物珍らしく觀るのみで拜禮して敬意を表する人どてはないと見えて、樹間を始めとして庭上はいふに及ばず、陵の丸塚の上まで雜草が生い茂りて蜻蛉の秋風にすい／＼と飛びつゝ、あるを見たととき盛衰榮枯の感深きものがある。

秋の日は青丹瓦にてり榮えて草生のつかにあきつ飛びかふ

こゝに奉天の見學を豫定の通りに完了し宿所にかへる、時に午後四時。大場訓導が午前

十一時十五分に打つた返電が午後二時十分に奉天へついでゐる、「ヒガイナシ」と聞いてうれしかった。僅か四拾錢の電報料で奉天田原間を七時間に通信が換される世の中である。折りしも大雷雨來り電燈明滅して夜に入り、ほどなく静かになる。

九月七日

—撫順—

本日は奉天から日がへりの撫順見學である。荷物をばそのまゝ旅館に置き、寒さうなればとてコートをはをりて出掛ける。奉天驛發午前六時五十分、撫順着八時二十五分、是より電車にて永安臺第二小學校に至る。設備の完備して居ること内地の中等學校にも見られぬほどで、手工教室などは動力を備へ、製板から、用材の切り穿らまでやつてゐるには驚く。

此處で撫順炭に關するお話を聞く。撫順は滿鐵の金藏ともいふべきだけに大仕掛に石炭の採掘をして居る。撫順炭の層の長さは拾里もあるのだが目下礦區としての面積は東西四里、南北一里となつて居る。其の厚さ平均百三十尺、最も厚い處は四百二十尺、總炭量は十億噸であるといふ。採掘箇所は露天掘、大山坑、東郷坑、楊柏堡坑、老虎臺坑を始めとして十數個所で、従業員四萬六千五百餘人である。従業員中黒くなつて働いてゐるのは支那人で日給平均一人六十八錢、三食の食費拾壹錢とは日給も安いが食費も安い、日本人で

は能率が二分の一で日給は三倍を要求するといふことである。

われ／＼は先づ露天掘へと電車で運ばれた。撫順炭層の最も厚い處は露天掘の地點で撫順總炭量十億噸の中二億噸は露天掘でやるのであるといふ。露天掘の計劃は一昨年か三、十年計劃であり、三十年間に掘り出す容積はパナマ運河の二倍半であるときいては驚かざるを得ない。さればこの計劃が立つて以來、それまで坑掘のつもりで上に造つた日本市街は全部他に再び新市街地を設けて移轉せねばならぬことゝなつた。大設計の新市街は半ば出來てゐる。露天掘の斷崖の上から見ると深さ二百尺、面積十萬坪以上の大穴が二ヶ所に穿たれてゐて、其の中には階段式に各階段にトロツコが設けてあり、石炭を掻き込みては一所へ運び、そこからケーブル式のトロツコで掘の上まで運搬してゐるのが小さき蟻のわざのやうに見えてゐる。これで尙炭層の深さの半分にも達して居ないのである。

われ／＼は掘を數段下に降りて見たが、殆んど全部石炭層でたま／＼薄い頁岩の層がある、今はこれから重油をとることが發明せられて、今まで役に立たない厄介物として捨てられたものが大切な原料となつて來たといふことである。

所々に坑があいてゐる、これは昔坑掘をやつた跡であるとか、四百二十尺もある炭層の中へ二間位の坑を横にあげて掘り出してゐた愚かさが笑へざるを得ない。

この大きな露天掘のあとには若し雨が降れば深い池になりはしないかと聞く人もあつた

が、炭層傾斜の關係からどんな雨がふつても露天掘の部分には水は溜まらないで地下の層へ流れこんでしまふとのことである。

四年前にこの露天掘を見た校長が再び茲にこれを見て其の變化の大なるに驚いてゐるといふ始末、こゝ三年も過ぎれば撫順の大市街が完成し、露天掘附近は面目一新して一大偉觀を呈することであらう。

吾等はこれより電車で大山坑に至りて、工場を一週したが、坑内に入ることはしなかつた。これより一千三百尺の下に事務所があり、あだかもどこかのベルディング内の夜景のやうであるとのことだ。これまでエレベーターで下るに五十秒を要するのみだといふ。この地下の事務所から蟻の巢のやうに坑道が通じてゐることである。

それより第二發電所を見て、撫順中學校に至り中食をなす。石炭細工のパイプや床置、硯等の賣店が出張して賑ふ。琥珀の數珠など土産物を求むる人も多かつた。

午後は高等女學校を見撫順神社に参拜し、社宅地に至る、社宅地は新市街の一地區をなし撫順神社附近の高臺がそれである。全部一大公園をなして、其の中に建てられた文化住宅が色彩あざやかに千種萬別の様式で、まるで建築の展覽會を見るやうである。撫順は周圍に高い丘陵があり、附近に渾河の流をひかへて居り、氣候が緩和せられてすみよい處であるといふ。撫順の社宅地は恐らく滿鐵附屬地中の出色あるものではないかと思はれた。

これより渾河のほとりに出で水道源地を見る、渾河の對岸のはるかむかうに撫順城が見えてゐる、これが支那の舊市街である。

午後三時四十五分の列車にて奉天に歸る。奉天では宿に歸りて一休の後十一時十五分の夜行でハルビンに向ふ。

九月九日

— 公主嶺、長春 —

夜の滿洲をさせた列車は四平街と呼ぶ驛に着く、起伏した丘の上から旭が出る。一望する處田原の権現山の墓地で神戸村の濱邊の方面を見た様子とよく似てゐる。只見渡す限りの島が高梁と大豆であるといふのが異つてゐる。樹木は白楊と柳と楡が多く、松の木は見あたらない。處々に荒れた地もあるが竹や笹は一本もない。この四平街から外蒙古を貫いてチ、ハルに至る鐵道が出來てゐる。

八時二十分公主嶺につき料理亭やまどに入りて朝食をする。食堂に入ると女中さんが「愛知縣の伊奈先生はゐますか」と呼ぶ、女中は名古屋式のスタイルのが拾數名ゐる、どんな女中さんが私を知つてゐるのかと、入口へ出て見るとにこ／＼した女中さんが小さい一室へ導きながら田原の校長さんですかとさかきなつかしうにいふ、顔を見てもわからない、室へ入ると面會者は女中さんでなくて三浦平君である。かつて學校の前に文房具店を開いてゐ

たのは十四五年も前だから風事が變つてゐる。「驛までお迎へに出たがあまりに先生の變つてゐられるので遂に見つかりませんでした」と大笑ひ、この地へ来て十年になるといふ、菓子屋で成功してゐるらしい。

九時半より一同馬車にて滿鐵經營の農事試験場に赴く、途中公主嶺尋常高等小學校を見る。

試験場に於ては滿洲の農業及試験場の事業について講演あり、尙畜産科に至り羊と豚の改良について講演をき、實物につきて詳細の話があつた。滿洲の北部は南部よりも土地が廣くて肥えて居り、品種の改良は産額の上に多大の影響があるので試験場は品種改良に専ら力を用ひて居るやうである。さたう大根や水稻や緬羊や豚の品種改良に關する苦心談をき、なるほどやつてゐるわい、あの滿鐵王國の大勢力の蔭にはこんな永遠なしんみりとした技術家の苦心研究も行はれて居るかど感心した。二十年前にはとれなかつた米が今は滿洲で自給自足が出来内地へ輸出してゐる、眞に滿洲を征服したものは米だけであるといふやうな話もきいた。

畜産科を見て居るうちに雨が降り出し、まるで田のやうな路を馬車で走るのだからたまらない。平坦なる北滿の土地は雨が降つても流れる方向がない、そのまゝ水がたまつてゐるのだから市街地から、一步ふみ出すと路のわるいことおびたゞしい。前のやまとへ歸り

て中食をなす。

中食後は自由開散となつたので三浦君に支那街へ案内していたゞき豆問屋、支那雜貨店等を見、三浦君の家にかへり當地産の梨をいたゞく、其の味の水蜜桃の如く、林檎の如く、實にうまいので、内地へ持参したいと思つたが内地まではもたぬといふ。三浦君馬車をよび同乗して駐屯軍兵營を一週し、停車場へと送つて下さつた。四時半一同發車。

車中夕立來る、雨の多きこと入梅の如し、珍らしの秋よと長春の人々もいふ。長春に下車したのは午後五時三十五分、雨は晴れてゐる。旅館名古屋館から馬車で迎ひに來てゐる。長春驛を下りたときの心地は實にいひ得難きものがある、放射状の大路が驛前の廣場から通じて廣大な煉瓦造の家の並んでゐるのは奉天でも撫順でも全じであるが、大きな白楊が森林の如くに茂りたる中に大和ホテルの石造大建築が見え、街路樹も大きければ路に家に何かに悠大であるのが流石にわが國鐵道の關門として恥かしくないとおもつた。

宿舍の名古屋館も大きい。すべてに完備した旅舎である。館主は愛知縣碧海郡大濱町の人であるといふ。旅舎に入るとまもなく、丹羽郡布袋町出身の坊さんで長春に來て社會事業に従事すること十七年ばかりであるといふ福田闡正氏が訪ねて來て、今晚八時から名古屋館主の遠藤と二人でわれ／＼愛知縣のものに茶を進めたしといひのこして立ち去る。

八時になると福田氏が迎ひに來られ、いふがまゝに氏に従つてゆく。茶の席はごんな庵

室かと思つてゐると、電燈のまばゆい大門をくゞる、林泉の美を極めた庭を通つて大きな玄關にゆく、窈窕花の如き美人が列んで迎へてゐる。帽子をとる、コートを脱がせる、スリッパをはかせる、われ／＼をば吸ひ入れるやうに二階に導く、まぶしいやうな華やかな大廣間だ。用意の席がわれ／＼をまつてゐる。どじまじするも見苦しいから思ひきつていふがまゝに大きく坐はる。名古屋館主遠藤君も来る。酒が出る。山海の珍味が出るまるで夢を見てゐるやうだ。

それよりも尙酔はされたのは福田君と遠藤君の話である。二人はわれ／＼に十年の知己の如くに、當地の話やら故郷の話、全くざつくばらんの歡談に時のうつるも忘れしめた。ことに福田君の血の出るやうな苦心談に一同感極まるものがあつた。

福田闈正君は坊さんにして坊さんくさくない、年の頃は五十歳あまりと見えるが、滿洲きつての快男子でないかと思はれた。其の素狀を探つて見ると、もと丹羽郡布袋町の善光寺の住職であつたが日露戦争の時慰問使として淨土眞宗からさしむけられ、各地を講話してまはつたが、戦後滿洲にとまりて布教するがよいといふので、郷里の善光寺をば父に譲りて滿洲にとゞまることとなり、暫く遼陽に居たが、今は長春に長春寺を建て、職業紹介、無料宿泊所、兒童日曜學校等の社會事業に力を用ひ、且又支那の大官や名士あたりと交り深きものあり、かつては黎元洪（たいげんこう）と共に武昌城内にたて籠りしことあり、又内蒙古に入

りて探險をやつたこともあるといふ。目下澤山の土地を所有してゐるが遼陽の支那人田某から三十年契約で借りたのだといふ。戸籍法のしつかりしない支那の土地所有權問題を論じてカラカラと笑つてゐる。氏は遼陽以來滿洲にあること二十餘年、氏によりて職業を得て成功したものが多いいふ。

名古屋館主の遠藤信平君は目下二十三歳である。其の父なる人は式太郎といひ長春のやまとホテルに靴みがきをしてゐる男、母は知多郡生れで、全じくやまとホテルの女中をしてゐた人で、目下名古屋館のおはつさんといへば滿洲三女傑の一人に數へられてゐて、滿鐵社長であらうが、張作霖であらうが、少しもおかまひなく名古屋辯むき出しに、どんな交渉にでも出かけるといふ人、夫婦そろつての働が今日の偉大をなしてゐるらしい。今は長男信平君に長春の本店をまかせて、自分は更にハルビンに支店を出し名古屋ホテルと稱し盛なる經營をしてゐる。信平君は田原町白井敏君の弟の磯貝君と大濱の小學校でも名古屋の中學校でも一緒であつたといふ、信平君は早稻田を出て今日の盛をなしてゐるが、磯貝君は今なき人となつてゐる。

色々話をきいて居る中に長春第一等の料理屋八千代館主瀧竹三郎君の話が出る。竹三郎君は日露戦役に騎兵として出征してゐたが、名古屋高岳町の人で相當の資産があつたにもかゝはらず豊本樓に遊興をつゞけて遂に豊本樓の爲に財産悉くを入れ、無一文となつた。

今まで若殿様のやうにもてはやされた竹三郎君も金がなくなれば人心も去り、初めて目がさめて遂に名古屋をどび出し、長春に至り大和ホテルに入り車馬係として奉公人生活をした。數年辛苦の後獨力料理屋を開業するに至つた。名づけて豊本樓といふ、自分を無一文にしたのは豊本樓であるから、おのれ亦豊本樓と名のり、忘れ難き名を記念にして開業した其の魂がおもしろい。長春には由來八千代館と稱し長春第一の料理屋があつたが、ついに瀧君これを買収し豊本樓を廢して八千代館に引きうつり今日も長春第一等の料理屋として榮えてゐる。この家こそその八千代館であるときいて驚いた。

福田君が吾々縣人をこの八千代館に招待して、縣人が血あり涙ある成功談を味はしめようといふ心であつたことがわかつた。館主瀧君がこゝに至るには福田君の援助によつたことも多いやうである。生憎瀧君が旅行中でお目にかゝることの出来なかつたのは残念であつた。

この外長春には愛知縣人の成功者が多い、花井脩治君は西三河の人、目下長春の事務所長である。由來長春の事務所長は學歴ある法學士であつたが、花井君は學歴なくして滿鐵でたゞきあげた無位の男で、この位置についたことは實に異數であるといふ。

其の外洋品雜貨店金泰洋行石黒仙次郎君(稻澤出身)、金物商科野五金行淺井庄一郎君(名古屋傳馬町の人)などは出色ある商店であるといふ。

九月十日

——長 春——

快晴、馬車を連ねて、高等女學校、城内、支那人私立學校である自彊學校、正金銀行を見て宿にかへりて中食。午後四時五分ハルビン行にのる。

長春市街は日本附屬地と商埠地と城内との三より成り、附屬地は人口二萬——内日本人八千四百——商埠地と城内の人口は合せて十三万人であるといふ。

自彊學校は城内より少し隔つた町の場末にあり、民國四年に王荆山といふ人が私財を投じて創立した學校で、今まで王氏の費せし金は拾万圓に上つてゐるといふ。支那人が支那人を教ふる學校としてはよく整頓してゐる。校長が昨年日本内地を始めて視察した折、各地に歓迎を受けたのに非常な感激をなし、日支親善は日支教育者の提携によらなければならぬと信じ、今回の吾々の旅行に就ても長春驛まで態々送迎をなし、學校では通譯を以て長い感想をふくんだ歓迎の辭をのべられ、吉林の中學校長が通譯の任にあたられた。吉林の校長籙氏は廣島高師卒業で日本語にも最もよく通ずる支那人である。

正金銀行の屋上では遼東新報支局長坂原孝久氏の明治三十九年に於ける、長春、寬城子問題について、日露交渉の顛末を語られ、當時の苦心から今日の長春まで出来あがりし第一戦にあるわが國民に對して敬意を表せざるを得ない感がした。

東支鐵道の二等室は満鐵とは趣がちがふ。列車の兩方の入口にボーイがゐて錠をおろす。車内には一側に廊下があり、各室に入るやうになつて居る。各室も中から戸じまりが出来る。一室は四人が定員で、長椅子が兩方にあつて中にテーブルがある。長椅子の脊のあたる部分はこれをぐいと引き上げると上下二つの寢臺となる。ボタンを押すとボーイが来る。右のネジで扇風機が動き、左のネジで電燈がつく。

長春からハルビン迄は高粱や牧場や見渡すかぎりの坦々たるもので、人家は半里位に一軒か二軒しか無い、全くあいてしまふ。驛毎に支那兵が不動の姿勢で列車を迎へてゐるのが殊更に目につく。

赤い夕日が遠く地平線に入り、三日月の影が空にあらはれたと思ふと、少し丘陵めいた處に來た。割木をたいて走る汽車は牽引力が足りないので、あともどりを始め、ついに立往生、數十分の後にやうやく丘陵を乗りきりて夜に入る。

寢臺が心地よいので夜に入つては、ぐつすりねむることが出來た。午後十一時近くになるとボーイ君が呼び起すのに驚いて窓をみると、あこがれのハルビンが見える。

北滿のやみちを走る汽車のまごに

光りまばゆくハルビンの見ゆ

汽車がつく、第一等のハルビン入りをやらうと眞先に停車場を出る。あとで聞いて見る

と第一等が幾人もあつた。それはその筈、奉天でも長春でもハルビンでも大きい驛では乗り降りの改札はしない、——吾々は切符一枚も持つてゐないが、切符のある普通の乗客でも同様で——切符の始末は車中でするらしい。改札がないから廣い出口からパツと一緒に出る。大國民式で心地がよい。

驛前廣場で伊藤公の玉碎を偲ぶ間もなく、出迎に來てゐる名古屋ホテルの自動車に乗る、三人づゝ分乗して、大きな石の建物のハルビンの街へすい取られるやうにまつしぐらに走り、旅館に入る。

やみの底に石の高ごの高く立ち

電燈さゆるハルビンの夜半

宿へついたのは十一時二十分すぎ、満鐵で合せた自分の時計の時間ではまだ十一時にならない、——二十六分ちがふ——湯を了つて茶をすつてゐると、五十格好の夫人が明日視察のプログラムを持つてくる、テツアリと肥えて、愛嬌のよい、底力のある鈴のやうな聲だ。聞かすとも是れが滿洲三女傑の一人である處の本館女將のおはつさんであることがうなづかれる、名刺を出して敬意を表すると、「おなつかしいなも」といつたやうな調子で全く名古屋辯で、話す／＼竹を割るやうにさわやかだ。

女將が帳場へ歸つたと思ふと本部から傳達がある、番頭案内で夜のハルビンを觀せてや

るといふのだ、一同三十名ばかり——外に別隊となりて先に外出したのもある——にこくした女將に送られて十二時過ぎから一時間あまり夜景見學、街はあまり明くないので一人では怖くて、とてもあるけぬが多勢だから強い、大きな石造の地下室に、屋上に、ピアノやバイオリンの聲がきこえる。ハルピンは夜なき夜の感がする。宿にかへりて日誌をしたため就寢は翌二時。ビールの話やダンスの話に花がさいて暫し眼がさえる。

九月十一日

——ハルピン——

午前九時名古屋ホテル前に集合。本日は自動車にて大ハルピンの見學である。大ハルピンといへば新市街、傅家甸、馬家溝、埠頭區、ナハロフカの總稱で、人口三十五万乃至四十万といふが其の規模に於ては實に廣大である。

自動車は傅家甸を一巡して新市街に出で下車して秋林商店に立ちよる。傅家甸は支那人が露西亞に負けじと力瘤を入れて作った市街で他の支那街とは違つて立派な堂々たるものである。新市街は露西亞の作った住宅地で一大森林の中に文化住宅が点在してゐる、色彩美しき住宅は悉く其の様式を異にし一つも全じものはない。ちらほらと散歩する露西亞婦人の服装が又一つと同じ様式のもが無い。帽子迄も皆違つてゐる全く創作的である。鮮人、民國人の住宅や服装が劃一的であるのに對照して其の民族の個性のおもしろきものがある。

ある。

露西亞人が廣漠たる北滿の荒野の真中に大市街を建設したのも、衣服や住宅にあらはれてゐる創作的氣分の大きく表現したに過ぎないとおもつた。各國領事館もこの新市街の中にある。秋林商店は露西亞人の經營してゐる雜貨店で滿洲各地に根をはつて居るときく言葉が通せないのと時間を急ぐので買ひたきものも買ひ得ない。

馬家溝に至り横川省三、沖禎介兩士玉碎の跡を訪ひ、志士の碑に參拜した。碑は横川、沖兩士の外に四名を合葬してある。高さ四十八尺、工費壹万五千貳百圓を以て大正十年十月に建立したものである。六名の志士は明治三十七年日露の役に東支鐵道西部線フヤルヂ一驛の東方嫩江に架せる鐵橋破壊の目的を以て北京を發し、ラマ僧に紛して蒙古を経、トルチハ驛の南方一邦里の地點まで來た處を露兵に探知せられ、横川、沖の兩氏は捕へられてハルピンに送られ、この處に銃殺せられたのである。外四名は行方不明となりしが茲に合祀してあるのだといふ。志士は其の目的を達せなかつたが横川沖兩士の最期の勇壯なりしと志士の意氣とは露西亞人を戰慄せしめ、露國の士氣に大動搖を與へたことは事實で、今や北滿の原頭高く志士の碑の聳えてハルピン在住者は氏神同様に崇祀し、九月二十一日には邦人三千餘名悉くこゝに集り志士の祭典を行ふといふ。

日露協會學校露國商業學校を視察し、午後一時頃東支俱樂部に於て露西亞料理の晝食を

なし、埠頭區に自動車をはせ、この地の銀坐通ともいふべきキタイスカヤ街を通りて茫々たる松花江畔に出づ、濁流洋々として東に流れてゐる、近く一キロメートル餘の鐵橋が視えてゐる。

哈爾濱日本小學校に至る。大きな三階建の煉瓦造で、朝會のやれる大玄関、熱帯植物の茂れる室内植物園、華麗な講堂、室内体操場、校内全部一丈四尺の室内廊下を巡らしたる、何れも内地人の吐膽をぬくやうな設備である。滿鐵沿線の學校の設備に驚きつゝ來たのであるが、流石にハルビン丈は滿鐵のレコードを破る設備である、國際的小學校の設備はかくあるべきかと感じた。

獨り學校のみならず、一番本家たる内地よりも、分家の朝鮮、朝鮮よりも滿鐵、滿鐵よりもハルビンといふやうに分家の分家がますますさかへて其の偉大をなし、本家の内地は小さく弱く、其の意氣を示すともなく辛じて生を續けてゐるやうな感じがする。これ逆か順か内地在住者の猛省一番あるべき事實であると思ふ。

日本小學校で滿鐵社員の北滿に關する講話をき、午後四時自由行動となり、市内の自由見學をなす、日暮名古屋ホテルにつく。夜日露協會學校職員で渥美郡牟呂出身の横田源次君來訪、快談時餘。時に大雨あり、夜景見學も出來ず。ハイカラな婦人の賣りに來たる寶石や繪葉書など見散らして寢に就く。

九月十二日

——ハルビン發列車中——

いよ／＼ハルビンの街とも別を告げて午前九時二十分發の列車にて長春に引きかへす。

かぎりなき草生の原に豚の子等

驢馬と交りて群れ遊ぶ見ゆ

久方の空に連なる高梁の

はたけに秋の風渡るなり

途中晝飯も忘れてグッスリ寢臺の上にてしまふ。長春に着いて下車す。自國へ歸つたやうな氣がする。時計を見ると赤い針が午後四時三十分をさし、黒い針が四時四分をさしてゐる。赤い針は露西亞時間、黒いのは日本時間、誰やらが「露國のは針まで赤化してゐるな」といふ。今までハルビン時間であつた時計を二十六分もどして滿鐵時間に合せる。十日に宿泊した名古屋館に入り夕食をすまし、午後十時三十分發に乗して夜行鞍山に向ふ。

九月十三日

——鞍山、湯崗子——

熟睡したまゝ列車は鐵嶺に着く、東の山から日が出る。このあたり遠からぬ處に高から

ぬ山が見えるあたりは渥美郡あたりと同じ感じがする。耕地も北滿に比してズツト整理してゐる。程なく奉天につき過日依托しておいたトランクをプラットホームにて大丸旅館のボーイ君から受取る。間もなく列車は發して蘇家屯を過ぐ、蘇家屯は安奉線の分岐點で、われ／＼はこれから新しい線路の旅となる。沙河の戦跡をながめてまさに遼陽に入らんとする左手にラマ塔が見える。これはラマ塔の中でも最大なるもので日露の役にも特に破壊せざることにつとめたといふ。遼陽を過ぎ首山堡を過ぐ。橋中佐戦死の首山堡の記念碑がかすかに見える。午前十時鞍山驛につき下車、これより無蓋貨車に載せられて製鐵所に至る。

鞍山製鐵所は滿鐵が最も力を入れて大製鐵所たらしめんことを期し、大正六年に設立したもので、其の規模は實に大きい。鑛區も數里に渡り其の埋藏料大約三十億噸を有するといふ。只鑛石が富鑛でなくて貧鑛である爲に思ふ丈の發達が出来ないやうである。富鑛とは五十パーセント以上の鐵をふくみ居るもの、貧鑛とはそれ以下のものにいふので、鞍山附近のは三十六パーセント内外に過ぎないといふ。

近年貧鑛を富鑛にする爲に還元焙燒法の發明に成功し、大規模な還元焙燒爐が出来て居り、世界第一の設備であるといふ。世界第一といへば鼻が高いが、現在の世界の大鑛山には富鑛ばかりで貧鑛がないから斯る設備の必要がないのだとさくと悲しくなる。併し世界

の富鑛は無限ではないから、何れは貧鑛から還元するやうになるに違ひない、さうなると此の器械などは世界最初のものとなるといふことである。

還元焙燒爐と溶鑛爐とを見せてもらつた。溶鑛爐の溶鐵が流れ出て砂で作つた畑のやうな鑄型へながれこむ處はまるでお伽にきく地獄のやうですごい。

滿鐵から今までこの製鐵所に金を入るゝこと五千萬圓、目下従業員四千名が發展するか否かの境目に立つて黒くなつて働いてゐる。

午後二時二十四分鞍山驛を發車して三十分ばかりで湯崗子につく、驛を下りると數町の柳の街路がざしつと茂つた中を通りぬけて温泉旅館對翠閣に入る。

湯崗子温泉は五龍背、熊岳城と共に滿洲三大温泉の一にして大正九年滿鐵會社後援の下に資本金貳百萬圓の株式會社を創立し對翠閣、玉泉館の二大旅館を新築し、且つ前經營者より引繼げる清林館及附屬として共樂館を増築し、更に大正十一年中國式高等旅館龍泉別墅の竣工を見現在に至つたといふ。

われ／＼の宿つた對翠閣は宏壯な二階建て純洋式及和式の客室三十二及大廣間二、外に娛樂室、食堂、應接室、理髮室等の設備あり、館内に大理石造の三家族浴室（鶴の湯、をしどりの湯、鷺の湯）と婦人浴室（かもめ湯、千鳥湯）と旭日形の共同浴場等あり、常に靈泉滾々として溢れ、隨時入浴に備へ之等浴室の屋上を庭園として浴後の逍遙或は眺望に

便にしてある。

かういふと腰をぬかしさうな温泉地のやうに見えるが、環境は茫漠たる平野で里餘の東に千山をのぞむ位の處で何の見るべきもない。而かも温泉旅館の外には人家一軒もない。内地の風光明媚の山間にあるものと趣を大にことにしてゐる。温泉の珍らしい満洲だからこれでも中々浴客が多いといふ。日暮れて西方をながむれば限りなき平坦な野の上に限りになく秋の夜は晴れて、白銀の如き上弦の月が只一つ懸つて居るあたり旅愁いひ難きものがないでもない。それでも娛樂室のあたりでは東京や名古屋大阪のラジオが大聲を張りあげて賑はして居り、久しぶりでゆつたりとした宿に足をのばしたので一酌陶然たる勢をあげて國境など唄つてゐる部屋もある。

私たち愛知縣の部屋は幸に旅館の最西方の一隅にあり最も閑靜なので午後八時には夢の國に入つてゐた。

天地のさかへの上に月一つさえてさびしき滿洲の原

九月十四日

——湯崗子發列車中——

本日の出發は午前十時二十七分といふので湯に入るものあり、散歩するものあり、斬髪するものあり、少しでも悠々たる湯治氣分を味はあうとしてゐる。

いよ／＼十時廿七分湯崗子を發して大連に向ふ。本日は特に視察の箇所としては一箇所もなく、皆車上より見るに過ぎない。

汽車が南下するに従て村落に於ける家のたゞすまひ、周圍の防風樹から屋根の様まで順次内地とよく似て來る。

温泉のある熊岳城驛を過ぐ、右手に望小山といふ岩あり、岩上に石像の立つて渤海灣を望むで居る。一奇觀である。昔愛子の渤海を渡るを見送りし母が惜別の情堪へがたく其のまま立つて石に化したのだといふ。程なく一つの驛につく珍らしく山に松の木がポツ／＼とあるを見る。驛の名をとへば松樹驛といふ。

車中では班長會議を開いて來十八日大連發のホンコン丸乗船に關する協議でやかましい。何でも二等の希望者が定員を超過して居るので、残りは三等とか一等とか、くちをしつてゐる。

普蘭店を發すると税關吏が來て、煙草と酒の検査をする、ウエストミンスターといふ煙草が内地では十本入七拾錢であるが、滿洲では十五錢で買へるといふやうな風で、甚しく安いから、誰もかれも百本入一箱位は買ひこんでゐる。一同は神妙にあるたけの煙草を出して税關吏をまつて居る。一々検査の印を押してまはられる。金州近くになると西方に海が見える。金州驛の西方形遠からぬ處に南山の戰跡記念碑が見えてゐる。南山といへば高

い山かと思つてゐたら小高い丘が五つ六つ隆起して、わか草山のやうに草が生えてゐるのみである。

東方に海が見える。程なく大連驛に入らんとする處で旅順から来た前の列車が貨物列車に衝突してゐるといふので、進行を停止してまつこと一時間半、列車を後に戻して下り線路から驛内に入れ、やつと故障なく、七時半大連につく。各縣の出迎人で驛頭山をなしてゐる。愛知縣は何處に至るもさびしい感がする。併し新帶國太郎君、榊原三藏君、松原斧吉君の師範の同窓三君が出むかへて下さつてうれしい。本日のわりあて旅館花屋ホテルに入る。

學校からとうちからの手紙到着。暴風状況の詳細がわかつて一入安心をする。

九月十五日

——大連——

大連は人口二十八萬—内日本人八萬—市街の規模の大なるに驚く。午前八時花屋旅館前に馬車は整列して地質調査所に赴く、地質調査所は滿蒙に於ける地質礦物の研究所で、滿鐵會社の立つたものである。こゝでは新帶國太郎君が説明係となつて下さる。新帶君は明治三十六年三月愛知縣第一師範の卒業で、東京高師の博物科を出で滿鐵に入り、先年本社から米國へ留學を命ぜられ、彼地の大學に於て四ヶ年間地質學を専攻して歸られ、今は大

連の地質調査所と奉天の教育専門學校と兼任であるといふ。この道に於ては滿鐵會社でぬきさしならぬ權威者であることが察せられる。明快で趣味ある説明には一同感心してゐた。それに標品が富かで容易に見ることの出来ないやうなものが、すらりと並べてあるので、地質礦物の趣味ある人は去りがたきものがあつた。

撫順十億噸の石炭は三十年後にかうなつて掘り盡してしまふのであると大きな模型で露天掘や坑掘や撫順市街の状態を示されたとき心細い感じがしたが、滿鐵の買収した熱河特別區域の新邱しんきゅうといふ處には質も量も撫順に劣らないものがあるといふ。尙又山西省には數百億噸の炭田があるから將來目をつけるのは山西省であるといふやうな地下のかくれたる調査がすつかり出来あがり、其の他一切の礦物についての分量まで示された大きな圖が出来てゐるのに力づくよく感じた。

日本橋小學校に至る。宏大な煉瓦建ではあるが、校舎は古い方である。一憩して校長より説明をきき、電話局に至る。こゝは自動交換をやつてゐる。交換手を使ふと四百名あまりを要するが、一人なしでやれて、而も全く機械的で支那語も日本語も露西亞語も要せない。そして使用さへ誤らねば交換のあやまりといふものは少しもないといふ。人智は何處まで進歩するものかと驚かされる。

中央試験所にゆく、こゝは滿蒙から出る礦物植物を如何に利用して産物とするかの研究

で、酒の研究から床にぬるリグノイドのやうなもので研究してゐる。

農事試験所と地質調査所と中央試験所とは満鐵が産業方面に發展すべき根本的の研究所であると思つた。

これより一里餘を馳せて星が浦に至り中食をなす。海岸に小さい島がボツ／＼とあり、天より星の落ちたるものなりとて星が浦の名がついたといふ。海水浴場や大きな公園が出来てゐて満鐵の静遊地としては心地よい處である。

涼しさは浮世の外や星が浦

午後一時より引きかへし昌光硝子工場に至る、茲はラツパス式の板ガラスの製造所である。長さ四丈、直径三尺程の圓筒が吹きあげられて、それがごろつと横にたをされ、一間づゝくらゐに切られて、其の一間の圓筒が又二箇に縦断せられ、それが壓せられて平板となるのである。仕掛も大きい焦熱地獄のやうな熱い處で顔や手をおほつて働いてゐる職工のえらいのにも感心せざるを得ない。

次に西岡子公學堂に至る。倉島校長から民國人の教育に關する意見や、民國兒童の長所短所についての講演があつた。

初め民國人の教育に關しては教へぬ方がよいといふ意見であつたのが、次に我國に都合よき日本同化主義の教育主義をとるやうになつた、それが今日では人道の立場から何等の

かけ引もなく眞に民國人の子弟を開發してやらうといふ意見になつてゐると聞いて私は最もうれしかつた。日本の教育が内外共にこの公平の立場に至らない内は眞に世界を救ふべき日本人とはなれないと思ふ。

午後四時馬車を連ねて遊覽道路に至る、遊覽道路は大連背部の山腹につくつた道路で市街を一望のもとに眺むることが出来る。大連ならでは出来ぬ道路であると思つた。

午後六時から愛知縣師範出身同窓新帶國太郎、榊原三藏、松原斧吉、伊藤治平、太田穰の五君に招待せられ泰華樓にて支那料理の饗を受く。

九月十六日

——旅 順——

午前八時二十分發にて旅順見學に向ふ。旅順についたのが九時三十六分。眼前に聳えてゐる高い塔は聞かなくとも白玉山の表忠塔であることが知られる。旅順は人口二萬三千—内日本人一萬—史蹟に富んだ閑靜な都會である。待ちまうけて居つた馬車に乗り、爾靈山に赴く。馬車は日本橋を渡り新市街に入り、關東廳博物館、軍司令部など車上に眺めて郊外に出る。立派な道路を登り登りて二十分ばかりで爾靈山下に至る。麓から徒歩で上つた。高さは田原の權現あたりから藏王山頂へ登つた位な感がある。併し途は立派な曲折した三間道路が頂上まで通じて居る。頂上には乃木將軍揮毫の爾靈山と書いた大きな藥莢と

砲弾からなる記念碑が立つて居る。二〇三高地で拾ひ集めた弾丸や砲の破片で造つたもの

であるといふ。

碑一つ立ちて語らず秋寒し

愛知縣よりの一同は到着直様記念寫眞をとる。案内者は臨地講演を始める活辯式で一寸くごい感がしてゐたが、旅順諸砲臺の大觀から始まつて、いよ／＼爾靈山攻落の慘狀を語るどきには一行八十餘名肅として涙を流してきいてゐた。現地についての具体的説明であるから泣かされる。

爾靈山上の一行

山の麓に小さい墓のやうな碑が一つ見える、これは第三軍の司令官乃木將軍の二男乃木保典が戦死した場所である。こゝに墓をたて、おいた處が、後日乃木將軍巡視の際これを見られ「旅順で戦死したものは二萬七千人もあるそれに乃木少尉の墓だけ一つ建てるといふことは、けし



からの直様取り除け」といふことで、其の後は何の標もなかつたが、將軍の死後、墓でさへなければ將軍の命にもそむくまいとて今は乃木少尉戦死之所といふ碑が立つて居るのだと聞いた。

あふれ出る涙ふきつゝ、戦の跡に立ちゐてものかたりきく

これより引きかへし新市街の博物館に至る、満蒙に於ける古來の歴史的參考品がづらりと列べてある。こゝにも一、二日あてゆつくり見たい心地がした。

午後一時舊市街の偕行社に至り第一隊と合して中食の饗を受く、廣東廳學務課長藤田氏の挨拶あり、松下團長の謝辭あり、旅順名物うづら料理に一同舌鼓をうつ。

午後は東雞冠山北堡壘に赴く。馬車は高さ百八十餘米の東雞冠山の頂上まで引きあげられる。案内者の説明は始まる、強襲の失敗から正攻法の困難、延長四千米の坑道作業、爆破の悲惨、肉迫の接戦一々月日を追うての具對的説明に一同涙をしぼる。壁壘は一部をのぞく外そのまゝ残つてゐる。この堡壘は旅順背面防備の東方にあつた永久的の構造で、壕の内面はすつかり厚いコンクリで出来てゐて、内部は蟻の巢のやうに道路が自由自在に出来て居る、肉迫も大砲も何とも仕ようのなかつたことは今想像するも難くない。

馬車はひきかへして記念館に向ふ。こゝは博物館の附屬で戦争當時の遺物參考品が並べてある。それより白玉山に登り表忠塔、納骨祠に參拜す。

表忠塔は高さ二百十八尺、市街の中央なる海拔四百八尺の白玉山上にあるので一大偉觀である。納骨祠には旅順二萬七千の戦死者中遺骨の明かなるもの二萬四千人が合祀してある。こゝから見ると旅順の市街はいふまでもなく黄金山下の港の口も眼下に見える。

これより馬車は水師營に向つて黄塵を立てゝ走る。上衣はまるで粉な屋の中にある人のやうである。まさに水師營につかんとするとき夕立が来た。大きな雨粒が太陽に映じつゝ、沛然として降り来る其の壯觀は何ともいへない。ホロを懸ける隙にビツシヤリぬれてしまふ。上衣は黄塵と大雨のこねませで泥汁をぬりつけたやうである。

夕立は忽にして晴れる。馬車を下りて乃木大將ステツセル會見の民屋を訪ふ。記念品、なつめの木などを見、講話も半ばきゝすてにして各馬車へと歸路を急ぐ。旅順驛へ引きかへしたのが六時十分。まもなく發車。八時十五分大連につく。

九月十七日

——大 連——

午前八時出發碧山莊へきざんさうに赴く、昨日の温きに反し今日はめつきり寒い。朝鮮で三寒四温三日寒くて四日温いといふやうにくりかへされる——といふことを聞いたがこの邊もさういふ氣候のあることゝ思はれた。

碧山莊は相生由太郎氏の事業の一つで大連埠頭の各種作業に従事する仲仕華工一俗にク

リーといふ一の收容所で埠頭を距る、東南約一哩の山麓東山町にあり、目下八千人を收容してゐるが、十二月から翌年五月迄は一萬三千人内外のクリーが生活してゐるといふ。それ／＼小頭ともいふべきとりしまりがつき、それを親分式のもものが統一して、これ等の親分全部に相生氏が命令をするので必要に應じて何人の人足でも繰出すことが出来る。クリーは山東から來てゐるものが多く、皆結婚の費用をためるために來てゐるのだといふ。無學のものが六割をしめ、現在八千人の中に新聞を購讀して居るものは只の六名しかないといふ、以て其の程度の低いことが伺はれる。程度が低いのと組織や設備が遺漏なく出來て居るのでストライキ的の行動はかつて見たことがない。クリー一日の生活費は二十四錢五厘、勞働賃金は一人平均五十錢であるが勤勞能力は内地人の二倍である。豆がす四枚を一時にかついで運搬の出來ないものは一人並としないのであるときく。強いものになると一人で八枚を一度にかつぐものもあり、出來るだけかつがせたら十二枚もつたものがあつたといふ。一枚の目方七貫三百といふから十二枚では九十貫近くである。

この力ある勤勞なクリーがある爲に東洋第一の大連港には荷物の上げ降しに要する器械的設備が至つて少ないので、始めて來た人は不思議に思ふが、クリーの話を聞かされてうなづかされる。

相生氏はもと名古屋の商業學校教諭であつたと聞くが、三井物産に入り、滿鐵に入り、

大連埠頭の事務所長にまでなつた人、今は役を退いて輸出入の荷物あつかひ、保険代理、建築土木の請負、石材の發掘販賣、港灣のうめ立て請負、埠頭人夫權、人夫收容所等が氏の事業であるといふ。

埠頭に行きながら附近の油房——豆粕製造所——を視る。大豆を壓搾したるものを蒸し、これを型に入れて再び壓すると豆粕になり、油は下に滴るやうになつてゐる。支那人が素裸で禪一つもしめずに働いてゐるのは初めて見たわれ／＼には實に滑稽を感じた。

埠頭に至る。大立關ともいふべき半圓形のコンクリの階段を登り、すん／＼と中の方へ入ると、大きな霞むやうな待合室である。待合室から橋を通じて乗船が出来る。待合室の下は貨物の積みおろし場で横づけの船のそば迄鐵道が來てゐる。待合室の階上は露臺になつて居る。埠頭は現在三箇完成して居り、其の延長一萬四千餘尺、同時に三十六隻の船舶を繫留することが出来、二萬噸の巨船も横付になるといふ。今第四埠頭の工事中で大正十八年に完成の豫定であるときいた。

埠頭事務所に至り、大連港の大要について講話あり、日本八百餘港の第一であることや、百年後の計劃をきいて人々は驚いてゐた。

中央公園に至りて中食をなす。中食半にして驟雨ありしが程なく止む、午後は自由見學となり浪速町あたりの店をひやして土産物を買ふ。

乙案丙案によつて天津、北京、青島見學のもの——全員の過半——は別に團隊をつくり、本日午後五時大連より出船す。風強くして浪高きを見る。

夜吾か校出身の中村立夫君と日高梯君に見出され天金とかいふ料理屋に連れられて十時頃まで快談。中村君は開業醫、日高君は日進油房に奉職してゐる。來滿の通知がないからやつと今日見出したのだと油をしぼられる。油房は油をしぼるのが本職だからと大笑。至る處に居る友人や教子に一本の通知もせずいつたことは却つて罪深いことであつたと思つた。

九月十八日

——大連發、船中——

本日はいよ／＼大陸より離れて内地に歸る日である。昨日來の風もやみて一同安心をする。午前八時自動車をはせて埠頭に向ふ。一行の乗船者——即ち甲案によるもの——は七十五名である。

部屋割が定められ、本縣五名は二等六號室に入る。人員の都合で中村縣視學だけ別れて娛樂室へ設けられた臨時二等室へ郷里岐阜縣のものど一所になる。

船は六千十噸の香港丸で十時近くになると見送りの人で埠頭の階上階下は人山を築いてゐる。仙臺人會とか何々縣人會とかいふ大きな旗もひるがへつてゐる。その中に船にむか

つてテープを投げるものがある。埠頭の階上階下の見送り人と左舷に立つてゐる乗客との間に引かるゝ五色のテープは益々増して幾百條となる。風にゆれて美しい。數百の人がそれ／＼一條のテープを通じて埠頭と舷とに引きあひて惜別の心をつなぐのである。船が出るに隨てテープをのばす。短きものは切れ、長きものは二町餘も連なる。實に壯觀極まる。斯る間に船は靜かに動き綿々別離の情をつなぐテープは一條きれ二條きれ、その間にハンケチを振る、帽をふる、かうもりをふる、かうもりに大きな切れを着けて振る、萬歳をさけぶ、名を呼ぶ、遠ざかつて全く見えも聞えもせぬやうになるまで、何とかして信號をしやうとする、かつて見ざりし壯觀な送別の光景である。

中食を終りて舷頭に立ち遼東の山を見かへれば最早やぼつ／＼と頂のみがかすかに見えるのみである。外には目をさえぎるものもない。午後二時には眼界全く一物なきに至り、無聊のあまりに碁が始まる、讀書がはじまる。私はこの間に失敬して三等室を巡覽に出掛ける。三等室の雑踏には驚く。本船の今回乗船客總人員は三百五十人であるといふ。

午後四時頃湯かわく大きな潮風呂で、大洋をながめながら入浴する心地はいふにいへぬ趣味がある。

午後五時頃には再び山が見え出す、山東省である。六時頃尖端數里の近くを通る、燈臺が明滅するのが見える。

夜になつて甲板に出づれば澄み渡つた月が中天にかゝり、船は月に向つて眞直に進行してゐる、金色燦爛として水波に映するの状はいひつくしがたい美觀である。やゝ秋冷を感じるので室に入り日誌を認めて午後八時ベッドにもぐりこむ。

九月十九日

— 船 中 —

湯がわいたとボーイが起しにくる。吾々の部屋は浴室の隣だから、いの一に起してくれた譯である。時計を見ると午前四時だ、湯を入れて甲板に出やうとすると五時であるべき時計が六時である、妙に思つてボーイ君に質す昨夜の中に内地時間に訂正せられたのですといふ。自分の時計も一時間も進めて標準時に合せる。

その中に東の水平線から旭が出る、一同左舷へ出て見つめてゐる。心地よいこと限りなし。

食堂へいつて原稿を書いてゐるとボーイ君が無線電報とかいた印刷物を配布して来る、本船の航海中各地に起つた新事件が記載せられてゐる。

午前十時頃から朝鮮が見える。午後は朝鮮近海の群島中を縫いて進む。突兀たる巖山ばかりである。その中に白い燈臺のある島が見える七發島とかいふ。

午後二時から船内見學の案内をして下さる。本船は閑院宮殿下が來廿五日に廣東州施政

滿二十年祝賀會へ御臨みになつて御歸りに御乗用になるといふので、掃除やペンキのぬりかへで大騒をしてゐる。

夕方になると朝鮮の島々も見えなくなり、巨文島の燈臺の光のみが明滅して居る、船はこれより方向をかへ北緯三十四度の線にそつて眞一文字に東へ進むのである。

空晴れて舊曆十二三日頃の月が大洋の波に映じて心地よい。甲板ををどろあるきするものが多い。八時頃三等室で餘興が始まつてゐるといふので、入つて見ると急造の舞臺が出来てボーイ君が浪速節をやつてゐる。その中に客の中からとび出して落語をやるものがある。中々一かどの黒人らしい。次に船員の琵琶が始まる。一同腹をよる。斯くして無聊な船中も花がさき村の祭にでもゐるやうな心地がする。

九月二十日

—船 中—

午前四時ごろ朝風呂がわいたと言ふて来る。風呂の丸窓から東を見ると、もう内地の山がすつかり見えてゐる。今日は門司上陸の日であるから取りまはしが早い。検査があるからとて朝食がいつもより一時間早く七時に合圖のドラがなる。八時には六連島の近くへ来る。ランチで検査醫がやつてくる、三等客は全部食堂に集まつて静かに腰をかけてまつてゐる。ボーイ君が時々ぞいては乗客の着席工合を見る。只今検査醫が参りますといふの

で一同静かにして待つ。乗客係の船員が付そひて検査醫がはいつて来る。着席してゐる一同を机間巡視といった風に顔を見て通る。一巡してしまふと「ア、失禮しました」といつて出て行く、これで検査はすんだのである。もうこれでよいのですかと念入りにボーイ君に聞く人もあつた。

八時半門司沖につく。今まで木のない山ばかり見て来た目には流石に老松の多い内地の島山がなつかしい。日本式の家屋も心地よいが灰色と白だけの色彩にはもの足りぬ感じがする。日本の山水畫に墨畫の發達したのもさもありさうなこと、思はれた。

ハルビン丸がゐる。關東廳施政二十年記念祭へ御臺臨の閑院の宮殿下が神戸からこのハルビン丸に御乗りになつて、今こゝまでお出でになつたのだと知れた。

門司や下關に下りるものは左右の舷からランチに乗りかへて上陸をする。僅かに六千噸の船を横着けにするだけの棧橋一つないのがなさけなく思はれた。

一行の多くは茲で解散したが、吾々は岐阜縣や和歌山縣のものと一緒に神戸迄ゆくことに變更し、出船の十二時まで船内に休憩する。愛嬌のよい少女が博多人形を部屋の中へ賣りに来る。無聊はらしに、色々とかからかつてゐる中に、つひ買ふ氣になつて一二品つゝ子供土産が出来る。その中に本屋がくる。菓子屋が来る。内地の新聞には久しく遠ざかつてゐるので各種の新聞を重複しない様に各々一種づゝ買ふ。一部の價十八錢といふ。見れば

十八日以来三日分である。新聞屋も氣をきかしてゐる。

十二時になると船が出る。舷に立つて春帆樓、壇の浦など指さしつつ進む。日向灘に出れば廣々として内海の心地もせず。

夕方旅客携帶品申告書を出せとのことでトランクの内容品を記入して出す。明日上陸の税關檢閲の用意である。

八時過ぎて舷上に出て見ると南方に電燈燦爛として不夜城の如き四坂島が見える。流石に住友の製鍊所であると思つた。

九月廿一日

—神戸上陸、京都—

午前四時めざむ。まだ早いと思つたがねられもせないのので洗面に出かける。皆人やつてくる。今日は上陸の日で誰も氣がせくと見える。乗船以來ゆかたがけでやつて来たが、今日は久しぶりで洋服にかへる。荷づくりをしてゐる中に朝食の知らせが来た。午前五時である。

食後荷物を食堂に運び檢疫と檢閲の用意をする。一同靜かに三十分をまつ。靜けさをやぶつて「只今檢疫です」と船員が嚴かにやつて来る。どんな嚴めしい檢疫醫かと思つてゐると、船員は一寸戸口のことを見て、一同にむきなをり、「もうこれで済んださうです」。檢疫

醫は入口まで来て顔をも出さずに、さつさときりあげてゆく、一同聲も出せず、目と目で大笑。ボーイ君曰く「二等室は信用があるからね」。

その中に税關吏が来る。申告書とつきあはせて、あらかじめ出してある烟草に一々檢査濟の印を押し、其の外トランクや風呂敷包の内容品をも一々しらべ、付けてある票札に印を押す。それがすんで上陸したのは七時半。

明後二十二日午後一時縣廳に集合を約して、是より思ひくの行動をとる。中村視學は郷里岐阜縣へ、伊藤君は大阪へ、成瀬、金子兩君は自宅へ、私と後藤君とは名古屋へ一泊もつまらないとて、京都に下車し、本願寺の彼岸會に參拜、三條いろは館に手荷物をおいて叡山電車にて叡山に登山す。

叡山電車は起點出町柳から八瀬まで普通電車二十分ばかり、八瀬からケーブルにて十分に終點四明岳に至る。これより徒歩十町ばかりで絶頂に至り、琵琶湖から京都市街を眼下一眸の中におさめることが出来る。このあたり茶屋あり、文化住宅あり、其の外遺憾なきまでに整頓したる遊覽施設がある。自然を害せず、人工に走らず、一條の鐵路がまたらす文化の大なるに驚く。

廣漠たる滿洲を見て来た自分等の目にはこの變化に富める山河の妙がいひ得ざる趣を感じた。

彼岸の爲に延曹寺へ參詣客も多いが、今晚があたかも八月十五日の名月であるので、觀月の爲に登山する客も多い。月下尺八演奏會などの催もあるやうである。割愛して夜にならぬ中に下山して、いろは館へ泊る。

九月廿二日

— 歸 任 —

早朝京都を立つて名古屋についたのは正午過ぐる三十分。直ちに縣教育會事務所に至り一同會合。教育會主事山村君始め役員諸君と中餐をなし、旅行中の傑作談などに花がさき三時散會。

往復二十五日、鮮滿三千五百哩の旅を畢へて無事に田原の驛についたのは午後七時。ごよめきあふ職員一同の歡聲に迎へらる。

幸多き者よ私！ 躍る胸をおさへて神に感謝しまつる。

(五) 旅後の感想

◇ 滿蒙の面積は奉天省と吉林省と黑龍江省と東部内蒙古とで約七萬五千方里—我が内地の三倍—、其の人口は二千八百萬—我が内地の二分の一—といはれてゐる。そして我が内地人の滿蒙に入つて居るものは僅かに二十萬人に過ぎない。

◇ 廣東洲租借地と數個所の附屬地とを七百哩の鐵道で連ね大連といふ大きな港で輸出入の關門を扼し、これに二十萬人のわが内地人を移して活動せしめてゐるのが滿洲に於けるわが國の勢力である。

◇ 滿蒙二千八百萬人は、わが二十萬人の爲に其の文化を支配せられて居り、併して滿蒙の支那人もこの文化に浴してゐるのである。強國の國民が幸福であり、又強國の庇護の下にある住民の幸福であることをつくづく感ぜざるを得ない。

わが滿洲に於ける施設は紀行文中にも述べた通り、學校といひ、建築といひ、港灣といひ、道路といひ、産業といひ、其他すべての施設が實に堂々たるもので、其れが只に日本人の爲のみではない。一例を挙げれば支那人教育にしても莫大な経費を支出して二十餘校の公學堂や其他の學校が各地に立てられてある。

わが國が支那人に對する教育方針としては最初は教へざるを勝れりとした時代もあつたが、それが日本同化主義の教育となり、今日では全く方針變じて支那人開發の爲には人道上からの目的以外に何等の懸引も無いやうになつてゐる。是れは獨り教育ばかりでなく、すべての文化の開發が實に正道の上に立つて盛なる伸展をなしつゝあるは限りなく喜ばしい。

こせ／＼した、せゝこましい、ゆきつまりさうな内地の諸施設を見て居る吾々の目には總てに大きく胸の開くやうな感じを興へる。

そして滿蒙の地は天然の資源に富み、土地も非常に肥えて居り、而かも羊や豚や馬がころ／＼と遊んで居るやうな未開の地が澤山ある。近ごろもハルピンの南方十數里の處に人

口五萬ばかりの町が露西亞の亡命者によつて出來たが、未だにどんな地圖にもものつてゐない、支那本國も知つては居まいといふ話を聞いた。其の土地の廣漠さが想像せられる。

やがて吾が國力が益々伸展して將來この滿蒙にせめて一千万の國民が移される時が來たならば、滿蒙の天地は日支人共存共榮の理想的が出來るのではないかと思はれる。

今までの世界は海岸線の長いことが文化の進む一條件であつたのであるが、將來鐵道が盛に敷設せられ、航空事業の進歩と共に世界の文化の中心は必ず移動を生ずるに違ひない。廣くて資源に富むといふことが將來の世界には力ある問題となりさうに思はれる。

滿鐵會社が四億四千萬圓の資金——日本政府二億二千萬圓、其の外日本及び支那人が二億二千萬圓を資出してゐる一株式會社——を以て二十年間の經營はまるで滿鐵王國の觀がある。わが國民が濶歩し、わが文化が支那に伸展してゆくのも強い大日本帝國を背景とした滿鐵會社の施設の致す處で、わが國民も滿蒙の支那人も滿鐵會社の恩澤を眞に謳歌せざるを得ないのである。

以上はわが國が強大でわが國民が幸福であることを述べたのであるが、私はこの旅行によつて國家の強いといふ幸福を感じると共に、最も悲しむべき現象を見出して心中最も不快を感じる一大事がある。内地ではかなり久しき以前から日支親善といふ語をきいてゐたから、日本人と支那人とは常に折りあひがわるくて、今も日支兩國間の問題として第一にあげらるべきものと思つてゐたが、どうして問題はそんなこと處ではない、今一步深くひこんだ重大問題に立ち至つて居る。

◇ 舊市街は支那の町で、新市街は日本の作つた附屬地であることは紀行文の中にも書いておいたが、舊市街へわりこんで日本人の事業を營んで居るものは殆んどないのに反して、附屬地の新市街へわり込んで業を營む支那人は年々に増して来る。日本附屬地の日本人曰く、一度支那人の斬髮屋へ行くとその味がわすられない。一度支那の風呂にゆくと其の心地が忘れられないと、かくして洗濯屋も、雜貨店も、ビール屋も、呉服屋も支那人の店がよくはやりて、日本の營業者は到底對抗が出来ない。

◇ それで附屬地の日本人は支那人をつかひ、支那の店から安い品物をかひ、生活がしやすい、内地よりもどれだけ暮しむきがよいかわからぬと喜んでゐる。日貨排斥は支那人なら

ぬ日本人が知らぬ間にやつてゐる、日支親善は品物の上にも人の上にも出来過ぎるほど出来てゐる。かくして日本の商人は支那人に對抗が出来ないというて居るのである。

◇ この現象はどうして起つて来たかといふと、私は思ふ、日本人の心掛けがわるいので生活の力が弱いからである。滿洲にいつて私共が羨しく思つたのは支那人の体格である、下腹の大きい二十餘貫もありさうな堂々たる男子が悠々と歩いてゐるのを見ると何となく壓されさうな氣がする。下層階級のものさうでないが、併し黒くなつてせつせと働くことを樂みとして、撫順でも按山でも旅順でも工場といふ工場は支那人によつて運轉してゐる。日本人では一時間もたへられぬ處に終日營々として働きを樂んで居り、そして其の力はといへば豆糟四枚かつげぬものは一人なみにせないといふ。そして賃金が安くて粗食に甘んずるのであるから日本人の勞働者が支那人に對抗の出来ないのは當然のことである。

◇ 商人はといへば、茲に一例をあげると、ビールを賣る場合に、自ら運搬して、これを入れてあつた木の箱を賣りてこれを金にし、これだけを利益とすればよいといふのであるからビールは原價で賣るのである。日本人が手を拱きながら支那人を使つて運搬し、多くの利益を見て賣らうとするのと其の敵でないことは明かである。それに吾々が買物にいつ

ても支那人の店は最も買いいい氣がする、日本人の店で色々のものを見散らしにして買はずに出て來ると、きげんのわるいのが顔色にあらはれるが、支那人はどんな見散らしにして一品を買はなくとも少しも悪い顔もせないばかりか、益々懇切に愛嬌をふりまいて終に買はぬつもり品の品まで買ふ氣にさせてしまふ。

この強い身体と勤勞と懇切と根氣とが日本人の仕事や年々に奪ひつゝあるのである。日本人は強い國家の保護によつて個人は弱くても生活が出来るが、支那人は國家が弱くて保護がないから個人が強くなければならぬので、國家といふ背景なしにどしどしと世界の何れへでも割りこんで個人的に事業を伸展して行く力があるのだ。

現在の日本人では資本があるか又は頭腦がよいか、一つの技術に長じてゐるかでなくては支那人との一騎打ちは出来ないのである。資本もなければ頭もない藝もないといふ人が何程滿洲に渡つたとて皆討ち死に出掛けるやうなものである。

聞く處によると滿洲にある内地人には滿洲氣分といふ語が出来てゐる。始め奮發して滿洲に出かける。一二年は支那人にも劣らぬつもりで黒くなつて働く。金が相當にたまる

と、もう働くことが嫌いになつて、立派な洋服を着る、立派な家に入る、女中をつかふ、下僕をつかふ、馬車に乗る、といふ風で、えらさうな風をして可成働かずに生活をしたくなる、内地より物價も安ければ雇人料も安いのだから斯様な生活をしても如何様にも當座の内はやつてゆけんこともない。これを滿洲氣分といふ。俥に乗つてゐる日本の紳士は一見えらさうだが、それを曳いて走つて居る支那人の俥ひきの方がどれ丈多い資産家であるかわからぬといふ。

日本人がこんな氣分になつてしまふといふのは心に何の信仰もないから正しい修養も出來ず、隨て勤勞とか奉仕とかいふことに樂みのあることがわからなくて閑散遊佚の享樂が其の氣分を支配するからである。

日本が如何に強國であつても、國家の單位である處の國民がこんな力ないことでは、其の濶歩の時代は戰勝の光のさめない年月だけである。所屬地へ入り込む支那人が年々に増加し、附屬地の實力を支那人が奪つてしまつた時來らば、それこそわが國の滿鐵を失ふ時である、現今の日本人のやうに安佚を理想とする精神状態では租借期限九十九年までの維持が六か敷くはないかと思はれる程である。十年目位に苦しまぎれの戰爭をやつては國の

威力を示して濶歩をつゞけるといふことでは未來永劫に平和の指導者たるの資格はない。

◇ 現代の國民教育でいふやうに國民道德や公民教育をやかましくいふのもわりくはなからう、生活に必須なる知識を注ぎこむことも甚しくわりくはあるまいが、こんなことでは知識はふへても生活の力は出来ない、道理だけはわかつて力も力の樂みが味へない。われ／＼はもつともつと先決問題として、われ／＼日本民族の個人個人の内在の神性を開發し心身共に世界優秀なる民族たる修養をなし、先づ第一にどんなことにも堪へ得る處の力ある國民となつて勤勞奉仕これ最大の樂といふやうになつてこそ、始めて、滿蒙に居る者は永遠に滿蒙の文化を指導することが出来る、廣く神ながらの大道を世界に敷くことも出来て、皇室と共に世界の人々から崇親の的となり、おのづから世界平和の指導者となることも出来るのである。力なき親善や力なき抱擁はやがて屈從となり、飼ひ猫に手をかまるゝの笑をまねくに至るのである。

◇ われ／＼はどうしてもこの際國民教育と民族精神の自覺が最大なる根本的の急務であると思ふ。各自己の精神にかへりみて、先づ自らを救ふ爲に心の上に一大維新の要あることを知らねばならぬ。

大正十五年十一月二十一日印刷
大正十五年十一月二十五日發行



著者
兼作者
發行者

愛知縣渥美郡田原町大字田原字池ノ原

伊奈森太郎

印刷者

愛知縣豊橋市西八町九十二番地

田中周平

印刷所

愛知縣豊橋市西八町九十二番地

三陽堂

311
298

終

